
レッドドライブ

グランドリオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レッドドライブ

【Nコード】

N2221H

【作者名】

グランドリオン

【あらすじ】

とてもちっちゃい、でも運動能力抜群の優、クールで冷静しかも背の高い海、男っぽい性格な椎、椎とはしゃぐちよつとずっしり体型な遙、その他にも一癖ある、中学時代はバスケット部の女の子達が、6人集まり再びコートで暴れ出す！！

2011/08/25に無事完結出来ました、ありがとうございました！

第0ピリオド・3 points (前書き)

まだまだ新米ですが、こんな自分が書いた小説を読んでもくれるとありがたいです。

第0ピリオド：3 points

夏休みのまつただ中、まだ午前10時を回った頃、ここ明水市総合体育館は朦々とした熱気、鳴りやまない歓声、さらに響き渡る笛の音、ボールの付く音で覆われている。

「あと31秒だよ。」「ぜってい勝とうぜ。」「疲れたなあ。」
「走つてよ。」「うん。」「いつくよ、12の3、」
「ディフェンス！」
「！」

両チームとも同点の残り31秒。ここは点を与えてはいけない時。しかし自分たちが決めないと勝てない。

再びゲームスタート。相手としてはギリギリまでボールを保持し最後に確実なシュートを入れてくるだろう。相手が外側でボール回しを始めくる。恵がパスカットしようとパスの軌道に手を出すが届かなかった。

「中入れっぞ。」

相手の身長180はありそうなセンターにボールを入れる。振り向いてのターンシュート、ここはゴール近く。時間も無い。間違いなくいれてくる。

「させつか！」

香がブロックしに行く。ピーー！！笛が鳴る。香がファールをしてしまう。カッソッ。ボールはリングを通過した。

「8番ファール、バスケットカウント、1スロー。」

相手のフリースロー。残り8秒。一斉に体育館内が静まる。シュパ。相手のフリースローが決まってしまふ。3点差。

この時点で誰もが勝負がついたと思った。

「あと8秒だ！」最後となろうオフェンスが始まる。

電光掲示板が時間を刻み始める。

「走れ！速攻！」恵の声がみんなを動き出させる。

「おう。」「走らせるな。」「セフティー！」

何人もの声が響く。ボールが弓なりにパスされる。

「優、行けえ。」

手元に来たパスを正確に受け取り優はドリブルしながらゴールへ走り出す。優の前には相手がコースを止めに来ている。

「くっ。」「これで私達の優勝だ。」

ドリブルで左へ、右へ、少しのズレをつくりそこから相手を抜き去る。

「なっ。」

優の綺麗なワンハンドシュートが3ポイントラインの外側から放たれる。

ボールが空中で弧を描いてる間、観客、選手、だれもが息を飲み時間が止まったような感覚に陥る。果たして3ポイントシュートは入るだろうか。勝利を揚げることができるのはどちらなのか？ 今、熱く揺れる戦いが始まる！！

第1ピリオド・Tip off (前書き)

お久しぶりです！。

改めて執筆の大変さを感じつつある自分です。
ではどうぞ。

第1ピリオド：Tip off

4月23日水曜日。ここ、県立萌黄高校はもうすぐ昼休みになろうとしている。

キーンコーンコーンコーン

午前の授業が終わり、昼休み始まりのチャイムが鳴る。

次第に廊下に生徒が出てくる。

その中で1人小さなバグを肩に掛け、走っていく少女がいる。

宮内優。とても小柄で身長わずか125cmしかないが目を見張るほどの運動量をもっている。見た目はまあ、幼児体型とでも言おう。目が大きく、すこし天然入りの天然記念物とクラスからは呼ばれることもある。

優の目指している所は体育館。優はこんな体型でも中学時代にバスケットボールをやっていた。

キャプテンやっていたことにはたいへん驚きだが。

「海、椎ちゃん、早く体育館に行つこう！」

優が呼んでから数秒後、2人はでてきた。

「さあ、行こうか。」

戸田海。

いつも冷静、性格もしっかりとしたいわばリーダー的存在。

肩にかかるさらさらな黒髪、かなりの長身が目を引き。

ちなみに185cmあるらしい。

「今日も早くバスケットしてえな。」

森山椎。

男勝りな性格。かなり大雑把。

グループ内の盛り上げ役。髪がかなり短いんだよな。

「今日のチーム、どーする？昨日は私と遙ちゃんだったよね？」

「じゃあ、私は優と、組むのか。」「人数もつと欲しいよなあ。」

3人が喋りながら体育館に着くと、

「今日はちょっと遅かったんね。」
遥がお弁当を食べながら待っていた。

横田遥。ずっしりな体型と優しい性格から、「保母さん」というあだ名がある。

パワーは学年最高を誇る。

ちなみに椎とボケツッコミの関係（！？）

「前の授業がね、」「国語だったんだよな、だりいぜ、あいつの授業。」「あなたは寝てたけどね。」

4人はいつも体育館で昼食をとり、その後チーム（2対2）でバスケットをしていた。

食べている時の話の話題はもっぱらバスケット関係。

どこのチームが凄かったとか新しいデザインのバスケットシューズについてとか。

「さつてー、着替えてこよう?」

4人が持っている小バックには、弁当・バスケットシューズ・シャツ・バスケットパンツ等が入っている。

その中からシャツとバスケットパンツを取り出し体育用具倉庫の中へと入る。

この中はけっこうスペースが広いので着替えやすいのだが、一年中通して冷たい。

夏にはちょうどいいけれどね。

「よしつと、バスシュ（バスケットシューズ）履っこー。」

バスシュは、バスケットプレイヤーにとっては自分・個性を象徴すると言われている。

優はオレンジ色を主体としたものを履いている。

ちなみに彼女はバスケットパンツもオレンジ色。

彼女自身が「オレンジって元気だよねっ。」と言っていたことがある。

「んじゃ、ゴール出してっつと、かーい、ボール出しといて。」
海が真っ黒なボールケースから取り出した。

このチームが使うボール、まあ女子なのだから6号ボールを使うわけだが普通の茶色、どこの学校にもあるボールではなく一面黒。そしてゴム、デザインのところが金色とかなりシビアなボールを使う。

本人曰く「親に買ってもらった最初のもの」らしい。何年前の話だろうか。

「じゃあ、今日は。私と優、椎とハルがチームだ。」「がんばろーねっ、海ー。」

「私にボールいれろっな。」「いや、俺がドライブして点ガンガン決めるっ。リバンドよろしくな。」

ジャンケンで優&海チームが最初オフェンスとなることとなった。

優がドリブルを突き始める。

優のDFは椎。椎は優に近づきプレッシャーをかける。

「ボール、ボール!!」

小柄で身長が小さい優にとっては椎はデカイ。遙や海が巨人のように思えてくる。

しかし優はボールをカットされないよう股通し（レッグスルー）や後ろ通し、ターンを使っていく。

椎を左右へ揺らしていく。少しのスキをつくりドライブカットインしていく。

「あっ、やべえ。打たれるっ。」

「打つよう。」

優が3ポイントラインのぎりぎり外側から綺麗、華麗とでもいうべきか、ワンハンドシュートを放った。

「遙リバンっ!」「うーん。」

ゴール下では海と遙のリバウンド争い、もといポジション取りの格闘が行われている。

「くっ。やはり、ハルは、パワーは強い。」

そりゃあ、学年最高だからね。

スツ。リングに当たらずネットを通過した。3 0

「入ったよー海っ。」「さあ、デイフェンスだ。」

椎から遥へスローイン、また椎へとボールが戻された。

椎が急にスピードを上げドライブしてくる。優が追いつこうとするがすでにゴール下へ切り込んでいる。

「海ー、カバーー!!」「よし。」

海が今にもゴール下でシュートを打ちそうな椎へブロックしに行く。海の手がシュートボールに触れる一瞬前、ゴール近くでフリーになった遥が、バウンズパスをキャッチする。

「なっ。」

「ナイスパス。」

遥のボードシュートが入る。3 2

「これからだぜ。」

「うーん。負けないよー。海、がんばろー!!」

昼休み終了まで残り12分。

第2ピリオド：First Control（前書き）

結構遅くなってしまった、ハア！。こんなんじゃダメだ、という訳で眠い目を擦りながら逝きます。

第2ピリオド：First Control

再び優がボールを運ぼうとするが、椎が詰め寄ってきてドリブルを突かせないディフェンスをしてくる。

「海ー、もらいに来てっ！」

海がボールをもらいに行こうとした。

「行かせるもんか。」

遙が海に対してボディチェック（自分のマークマンの進行方向への妨害。タイミングが遅いとファールになる。）をして、もらわせないようにしようとしたが、遙より海のスPEEDが勝った。

遙はパワーはスゴいけど、ずっしりしてるもんね。

「優、ハイ。」

海へとボールが回る。

「海、ボール運んで！」

優はディフェンスをかくぐるとフロントコートへ走り出した。

椎が追いつく前にパスが出される。

「打たせるか！」

椎が優の3ポイントシュートをチェックしに行く。

ジャンプした。1メートルは跳んでいるような高いジャンプ。優のいまにも放たれるシュートをブロックした。

優はしまった、とでも言いたそうな顔をしている。ボールはコートの外にでた。

「すごいなー。」「まっただまだな。」

優のスローインから再開される。

海が遙の前のポジションをとり、パスを受ける。得意のターンシュートを打とうとするが、ターンしたことによりできた前スペースを詰められてしまい、思った通りのシュートができず外してしまった。

「リバウンド、とらせない。」

「どーかな？」

遙がスクリーンアウトをがちりし、海にリバウンドを渡さない。ほんとに遙はスクリーンアウト（リバウンドをとるために相手よりもゴールの近くのポジションをとり相手にその場所をとられないように押さえつけておくこと）が上手いんだよな。

遙から椎へパス、そのまま椎がゴールへドリブルしていく。

「簡単に点はとらせないようっ。」

優がなんとかドリブルコースへ入った。が、椎はクロスオーバーしてかわす。

そのままゴール下へ。

「チエーツク！！」

優がボールをたたき落とすしに行く。その瞬間椎はジャンプシュートを打った。

優の手が椎の腕にあたる。シュツ。ファールされながらのシュートが決まった。バスケットカウント1スロー。

「よっしや。フリースロー一本入れて突き放しますかっつ。」
「落ち着け。」

「ごめん、海。」
「ドンマイ、ドンマイ。」

一チーム2人しかいないので、最後のフリースローが入ったら相手のスローインから、外したらフリースロー打ったチームからのスローインから再開と決めてある。

ふう〜。ガツンツ。

フリースローが入ってこれで3、5、ワンゴール差となった。

「ういー。はいったぜい。」
「昼休み終了まで残り9分。」

残りの9分間は激しい攻防戦となった。

連続3ポイントシュートとか、スティール（相手のボールを奪うこと）からの速攻、

ミスマッチプレー、特にゴール下のリバウンドは白熱した。

海が跳び、遙はジャンプするのを防ぎ、遙が取りそうな瞬間に手を

伸ばしてかつさらったり。

結果12 14。

「あゝあ、汗びっしょりだねっ。」「最近熱いもんね。」「スプレ
ー貸して。」「これ、」

また制服に着替え、ゴールをしまっ。

体育館からでると涼しい風が体に当たる。

「んーっ、気持ちいいね。」「授業、もうそろそろ始まるかも。」「

「急ぐぞ、ダッシュユー!」「また後で連絡するよ。」「

4人はそれぞれの教室に戻っていく。

3組、遥は午後の授業のほとんど寝てしまっ。

午後につまらないような授業が固まってあるらしい。

4組、優はちゃんと起きている。

大半は近いクラスメートとの雑談になってしまっ。

5組、海&椎は席が隣同士。

そのためかほとんど椎が話の起点として、それに海がつっこむのが
日常となっている。

「よしっ、学校終わったからみんなと帰ろー。」「

4人はいつも昇降口で待ち合わせし、帰っているのだが、クラスに
よって終わる時間がかなり差がある。

「よしっ、販売機でスポドリ買ってこ。」「

いつもこうして待っている間に飲み物を買ったりして時間を潰す。

ちなみにここの自販機、500mlで80円の安さを売りにしてい
る。

「待たせた?」「いやあ。」「今日どーするよ?中学校いくか?」「

「今日は、水曜だから、中学校のコート、空いていると思う。」「そ

れじゃー、4時10分に月野中だねーっ。」「じゃ、帰りますか。」「

4人は自転車に乗って、喋りながら、一旦解散した。

第2ピリオド・First Control(後書き)

次の更新は中旬頃になりそうです。

第3ピリオド：Field Goal（前書き）

最近、暑すぎていろいろな事に力が入りません。

が続きを投稿するために冷房がガンガン効いた部屋で執筆していた

らこの前熱が37度を超え風邪をひいた（笑

という訳で3話投下しますよ。

第3ピリオド：Field Goal

4時10分。月野中、外バスケットコートに4人集まっている。

みんな動きやすいシャツ、ジーパンや短パンの格好をして来ている。体育館で使うボールは海が持って来ているが、もちろん室内専用ボールを屋外で使うわけにもいかない。外用ボールは優と椎が持ってきている。

ちなみに全員体育館用はもっているのだが、話し合いで海が持つてくることになったのだ。

このコートにはフリースローラインや3ポイントラインなど、コートラインが引かれているためにけっこう使いやすく珍しいのだ。優のボールはゴムグリップに沿って黄色いラインがあるタイプ。

椎ボールは学校にもあるタイプ。4人が各自でアップを始める。

「春なのにアチーな。そこら辺に自販機あったっけなあ?」「ないと思うよ。私は今日は学校で買ったスポドリ持ってきたよ。よかったら飲む?」「スポドリとか甘いのがダメなんでい、悪いな。」「私のお茶あげよっか?」「お、遙サンキュウ。」「3人が談笑しながら準備運動をしている傍ら、海はすでにシューティングしていた。

「早く。始めるか。」「

放課後のチーム組みは完全ジャンケン制となっている。

つまり、センターとセンターが組むということもある。

「椎ちゃん、よろしくっ。」「パス出すっから決めるよ。」「うん。

「相手の、シュートは全部、ブロックしにいこう。」「椎に抜かれないようにするよ。」「

海&遙のチームからオフェンス開始。

遙が始めにボールを運ぶ。

マークマンは優。遙より海の方が若干だが背が高いので、椎に海をマークさせようという考えだった。

海が中でポジションをとろうとして中に入る。

だが椎は中に入ってくるパスをカットしようと海に前をとらせない。なかなか前がとれない海は一旦椎をふりきり外へ出てくる。

遙はそれに合わせオーバーヘッドパスをだした。

海は空中でエアークャッチしそのまま身長に見合わないスピードでドライブしていく。椎がゴール近くでドライブコースへ入った。

「俺を抜くのは百年早いな。」

「どうかね、」

椎を背にするような体勢でぐいぐい椎を押し込み始めた。

ゴールの真下までくる。そのままバックシュートを打っていく。

「バックだと？外れろっ。」

バックシュートは、体勢が悪いとかなり入らない、しかもある程度のスピードがないとリング手前で弾かれるところがあるのだが。

そのボールはきれいな放物線を描きボードに当たらず入った。

海って手が長いのね。0 2。

「椎ちゃん、ドンマイだよ。」「いままであんなシュート打つてないのに。くそ。」

優が椎にスローインパスをだそうとするが海がついてくる。

椎が振り切ろうとするが手を前に出されてしまうのでパスを通すことができない。

「優っ、フロントコートへ投げて!!」「えっ、うん!」

優がなるべく遠くにシオルダーパスを投げる。椎がボールめがけて走り出す。

「ははっ、海、追いついてこいよ。」

海より椎の方がスピードがあるのだから、たぶん追いつかれること

はないと思う。

「速攻ー!」「うい。」

ボールをキャッチしそのままレイアップへ

しかし、

「入れさせないぞ。」

横から遙が飛び出してきた。

「うわわー!!」

スピードを堪え切れずそのまま、コースへ入った遙へとぶつかった。

「ぐはあ、うぐ。」「痛ったー!!!!」「大丈夫!?!」「う、まあなんとか。」

怪我はしてないようだった。海がホッと胸をなで下ろした。

「今のはどっちのファール、リーダー?」「海、どう?」

海が今のはどちらのファールか迷っている。

基本的に相手のドライブコースの正面に構えていればオフエンスチャージング、少しでもずれていればディフェンスのファールとなる。

海は、椎が跳ぶ前にハルが正面へたつた、なら「椎のチャージング、かな。」と判断した。

「そっかあ、惜しかったな俺。」「危なかったよーう。」

海&遙からゲーム再開。海がボールを運んでいく。

椎がカットしようとして飛び出していく。海が左へカットイン、椎がコースへ入ろうとするのを確認した後、右ロールで抜き去った。

海はゴールしただけでなく1対1スキルも持ち合わせている。

「優、カバー頼む。」「おっけー。」

海のコースへ入ったが、フリーとなった遙にパスが渡った。

「よし。」

遙のゴール下が決まる。0 4。

「まっずいよう、どーする?」「とにかく抜かせなきゃいいんだよ。ゴール下でジャンプしてブロック、リバウンドすりゃ。」「なってるほどー!」

優のスローイン、そして優に戻る。センターラインで椎にパスが渡る。

「行っちゃえ!」「うしゃ!」

ゴールの手前までドリブルし、ジャンプシュットする。

椎は高さで足りない分を持ち前のジャンプ力でカバーして海のブロックシュットを防ぐ。

ガシャン。外した。

「リバン!」

遥と優とのリバウンド勝負。遥が優に対してスクリーンアウト、優が押してもビクともしない超重量のスクリーンアウト。遥がリバウンドを取った。

そのまま海へパスしようとするが、

「待った、落ち着け。」椎が海に対してディナイ（パスを通らせないようにするディフェンス）をしてきた。

海は椎を左、左へと押し込んでいく。そして一気に右側へ開きパスを要求する。

「へい、」パスをもらい「左に開いて、もらって。」

遥が左へ行きパスをもらおうと走り始めた。

海が遥へパスをだす、が優のジャンプパスカットで弾く。

そのままルーズボール（誰もコントロールしていない状態のボール）争いとなる。

優はカットの反動でスタートが出遅れたし椎より海の方がボールに近かったために海のボールとなる。そのままゴールへ一直線に進む。優がカバーしようとするが遥のボディーチェックによりカバーできず、本日2本目となる海のレイアップが決まる。

0 6。ヤバイね。うん、もうこれは。

第3ピリオド・Field Goal(後書き)

次の更新は月末ぐらいになると思います。
あとなにか感想ください。

第4ピリオド：All Coat Press（前書き）

やっと、地獄の夏休みが終わったとかホッとしてたらテストがあるとかね。もう俺に休憩ないんじゃないか。最近そー思う自分です。

第4ピリオド：All Coat Press

優と椎のオフエンスが始まる。

椎がパスを受けようとするが海がディフェンスしていてなかなか通らない。

椎を前に走らせての速攻も考えたが、

遥がロングパスをカットしようとしている。

「海の前を取って！」椎が海に背を向けるようにし、なんとかスローインパスが通る。

優は走らずに椎の横でボールをもらう。

優がドリブルし始める。

「2vs1だよ！走ってっ。」

優がボールを運ぼうとすると海が出てきた。遥がカットできないようなスペースへ椎は走り込む。そこへのパス。

椎が遥と1対1をする間合いまでドリブルしていく。

「行っけえ。」「おうよ。」

椎がカットインしていく。遥がコースへ入ろうとするが抜き去られた。

遥はブロックショットその他ゴール下の仕事はメンバー1、しかしスピードはワースト1。当然追いつけない。

抜き去った後のコートにはカバーとなる海が優とマッチアップしているためにいない。

ノーディフェンスのレイアップが決まった。26。

「やったあ、初の得点だねっ。」「次からプレスかけよーぜ。時間

あんまねーし。」「うん、いいよ。つらいけどね。」

海からのスローイン。

優と椎が2人がかりで遥をコートの隅へと追い込んでいく。

「なっ。初めから、プレス!?!」

海は自由にパスを出せる。がパスサー（パスを受けるプレイヤーのこと）がパスを受け取れない。

遙が強引にプレスを突破しなんとかボールをもらったが、もらった場所が悪い。

ピボットしてしまうとラインを割る可能性がでてくる。今度は椎一人で遙にプレスしていく。優が海へのパスをカットするためにディナイディフェンスをする。

椎は遙より身長は劣るもののジャンプ力と瞬発力で遙を苦しめていく。

「くっ、パスが出せない！」

椎の手がボールに当たり始めている。ピボットし空くスペースを使いパスを出そうとするが、ラインを超えてしまった。

「ライン踏んじやった。ゴメン、海。」「いいよ、別に。こっちもプレスを、かけていこう。」

「やったあ。プレス成功だね。」「次から3ポイント狙っていけよ。」「じゃーリバウンドよろしくっ。」

お前のスリーはほぼ100%入るからあんま必要ないけどな、と思いながらスローインしていく。

「パスは入れさせない！！」「優のチェック、いいよ。」

遙が腕を振り、パスコースを制限していく。優が海のディナイを振り切ろうとするがなかなか振り切れない。海をコート右側へ押し込んでからもらおうとする。そこへのパスが

カットされてしまう。

「ハル、走れ。」

「悪い、あんな所へパスしちまって。」「ディフェンスで取り返そう！」「そーだな。」

海がゴールヘドリブルしていく。そのコースを優が止める。

ドリブルのスピードを落とし、優に対して背を向け、押し込んでいく。

ゴール下まで押し込むとそこからバックシュートを放った。ボール

が手を離れた瞬間、ボールがたたき落とされる。

「ふう、危ねーな優は。ほら、ルーズボール。」「ありがとう。椎ちゃん。」

海、優それに加え遙もルーズボールを追いかける。

一番早く触ったのは遙だが優が奪っていく。そのままドリブルしていく。

「ハル、止める！」

「スリー、行けえ。」

優が3ポイントラインの1メートル手前で止まり、ワンハンドシュート。

打つ瞬間に遙がブロックしようとするがボールではなく左手をたたいてしまう。

「ぎゃっ。」

優が驚いて声をあげながらのシュートが決まる。5 6。

遙のファールによりバスケットカウント1スロー。

「やったじゃん、優。」「あう、今はまぐれだよ。」「フリースローで同点だぞ。」

「ドンマイ、ハル。入れられても、入れ返すこと。」「うん。」
人は拳をぶつけ合う。

シュツ。フリースロー決まる。6 6。

「さあ、どんだん、押し込んでいくよ。」

「逆転しよーぜ。」「うーん、したいね。」

「あゝあ、結局負けちったな。」「次頑張ろっ、ね？」

「疲れた。お茶飲もうか。」「次、フリースロー、対決だから。」

「うーん、分かった。」

25分のゲームが終わった。ちなみに結果は24 - 30。

海たちの勝ちということになった。

ゲームが終わった後は恒例のフリースロー対決となっている。

先に3本入った人から帰れる、ビリは次の日の昼休み、体育館コートを取っておかなければいけない、というルールだ。

打つ順番はジャンケンで、優海 椎 遥となった。

シュパツ。「また入ったよ。」スツ。「私も、入った。」

カツンツ。「入らなねえな。」「なんで入らない？」

「今日は調子が悪いだけだよ。」優が応援する。

シュツ。「じゃー私帰るねっ。」「私も、優と、帰る。じゃ明日。」

2人が最初の3本で全て決められた。

「なーんでそんな3本連続で入るの？私なん「入ったぞおー！！イェス！」何ー！？」

遥がフリースローレーンに立ち、やや崩れているフォームで放った。

カツンツ。「落ちるか、落ちないか！？」ボールが丁度リングの上で回転を始め、そして、

サシュツ。入った！

「私も入ったよー。」「むむ、やるなあ。」

2人もまだ1本しか決めていない。確率33%ね。うんなかなかだと思う。

「たやあー！！」シュパツ。椎の2本目成功。

「くっそ。最近入らないんだよね。」カツンツ。遥が外した。

次に椎が入れば遥がビリということとなる。

遥が椎に落ちろ、とか言っているが実際効果あるのかどうかは知らない。

椎が決めれば帰れる3本目を打った。

バシュンツ。バックボードの真ん中に当たってそのままリングの中へ。

「よっしやーあー！！！！3日連続で勝ったぞ。」「また負けた・・・

悔しっ。」「じゃー明日もヨロシクな。帰るぞ。」

2人は、お茶あげよっか、おっ、とか話をしながら月野中をあとに

した。

第4ピリオド：All Coat Press（後書き）

もっと更新ペースを上げていきます。

批判でもいいので、できるなら感想、評価をください。お願いします

す
—
—

第5ピリオド：Turn Over（前書き）

この前に投稿した短編小説とこの作品の人気の違いはなんだろうか？
たぶん作品ジャンルだろうなと感じてきた自分です。

第5ピリオド：Trun Over

5月11日、月曜日。

優達4人は4組でおしゃべりしている。

話の内容はゴールデンウィーク中にあったことについて。もちろんバスケ関係の話だ。

高校の大会を見に行ったり、隣の屋外バスケットボールコートへ行ったりと。

ついでに椎が新しいバッシュ（バスケットシューズ）を買ったから早く昼休み、体育館で見せたいとのこと。

キーンカーン、というちよつと不調子のチャイムがなり、本当なら体育館へ走っていく4人だが運が悪いのか全員、日直担当だったためにチャイムが鳴ってから3分後にようやく教室を出発（！？）できた。

「こんな事って初めてだねっ。」「そうだな、誰かに使われてなければ、いいが。」

「週刊バスケ、今週号持ってきたよ。」「早く新・バッシュでプレイしてーよ。」

いつものような雑談をしつつも体育館に到着すると見慣れないバッシュケースが2つと赤色のボール入れが置いてあった。

4人がそれに気づいた時、中からドリブルの音が聞こえてきた。

いつも昼休みの時、体育館のステージ側をバトミントンする人が使い、玄関側が優達が使っているという状態になっている。

つまり優達が使わない限りドリブルの音は聞こえるはずが無い。

「先客が、いる。」「今までこんな事なかったね。」

「どんな人がやってるのか見てみようっ。一緒にバスケしてくれるか聞いてくるっ。」

海は行こうとする優を止めようとするが、だいじょーぶつ、とか言いながらバツクを置いて行ってしまった。

「だ〜れですか？」

ドリブルの音が止まり、その人が優へ顔を向けた。

「おっ、優じゃん。どした？」

「香ちゃんこそ、バスケットしてたんだねっ。いつもここでバスケットするから今日もって。」

宮代香。

椎ぐらい男っぽい性格、かつ180の長身のため恐れられている。

優のクラスメイトであり出席番号が隣でよく話す関係にいる。

「じゃーなあ、一緒にやるか？」

「みんなに伝えてくるねっ、っとその子だっれ？」

もう1人が優に挨拶をしようとした瞬間、他の3人がバツシュを履いて来た。

すると遥が香でないほうの人と話し始めた。

「めぐみんじゃん。バスケット一緒にやる？」

「うん。人数多い方がいいし。」

神橋恵。

ふだんはちょこつとテンション低め、しかし1度スイッチが入ると止まらなくなる性質をもつ。髪を少量だけ真上に止めてあり彼女のトレードマークらしい。

「何なに？どうしたんだ？」「2人が、知っている、人らしい。」

海と椎が会話に入ってくる。

「じゃあみんなバスケットしよっ！」

優の提案で6人、つまり3対3をやることになった。

「じゃーこれからよろしくっす。」

「よろしくね。」

それぞれが挨拶を交わしチーム決めとなった。

「優と恵がガード、椎と遥がフォワード、私と香がセンター。それで2人ずつ、ジャンケンで、勝ち組3人、負け組3人の、チームに、

すればいいかと。」

「頭いいじゃねーか、リーダー。おい遙、さっさときめよーぜ。」

「めぐみんと一緒にになりたい。」

「優、ジャンケンだよ。」

「うんっ。」

「香、よろしく。」

「あー、負けないぜえ。」

「マッチアップは初めてだね。」

「新・バッシュ、ゲルクロスオーバーの実力を見てやるか。」

結果（！？）、優&椎&香のチーム、恵&遙&海のチームとなった。さらにジャンケンにより先攻は恵チームとなった。

「よろしくねっ。恵ちゃん。」「うん。優。」

昼休み終了まで30分。

ボールを持った恵と優はセンターサークル（コート真ん中の円）内に入る。

これから、みんな初の3対3が始まる。

恵がドリブルを突き始める。かなり上手いドリブルをし、手に吸い付いている感がある。

「はるちゃんはもつと広がって。海はハイポスト（フリースローを打つライン近辺エリア）を確保して。」

恵の素早い指示が飛ぶ。

指示している間に優がドリブルカットしに行くが、なかなかとらせてもらえない。すごいなあ、と優は感心した。

遙がパワーで椎の動きを封じ込めパスカットされないようし、ボールをもらっ。

と、同時に香の前に海がポジションをとる。

「ハル、入れて。」

遙がパスをした瞬間に香が、いつの間にか海の横にらんで左手で

カットしていく。

そのまま左手でドリブルし運んでいく。

「速攻だ、走れえ。」

椎と優が声と同時に前へ走る。

海は何があつたのか把握できていないらしい。

優が走っているコースの延長線上、レイアップのしやすい位置へ香からのパスが来て、それをエアークャッチ（空中でパスを受ける）して点を決める。

2 - 0。

「ナイスパスだよつ、ありがとう。」「おらおら、次のディフェンス集中だ!!」

「はるちゃんはなるべく椎を引きつけといてね。前に走らせないように。」「分かった。」

恵と遥は2人でボールを運んでいく。

センターラインを超えた所で恵にボールを預けた。

「海、香をローポスト（ゴール下エリア）で封じ込めて。」「うむ、

そのまま遥は椎を背にしてポジション取りを始めた。

前を取られてどんどん押し込まれていく椎。そこに恵からのパスが来る。

「くつ、たあすげえパワーだな。新・バッシュがすり減りそうだな。」

遥は椎の左側を抜けてターンシュートしようとする。

「されっかよつ。」

椎持ち前のジャンプ力ではじき返そうとジャンプしたが、

「甘いね。」シュートフェイクにかかる。

椎が着地した瞬間にショットする。が、遥はシュート率が悪いのが欠点。

リングに弾かれて右にこぼれ落ちる。

「リバンー!!」

恵と優の声が重なり合う。

海は香より5センチ高い。

それに手も長いのでリバウンドがとれるはずである。というか今まで殆ど獲ってきた。

さらに今回はスクリーンアウトをし封じ込めている。取られる要因はない。

ちなみに5センチの差はバスケットにおいてかなり影響してくる。

海の手にもうボールがふれる瞬間、海はなぜかアウト（スクリーンアウトの略名）の体勢をくずしてボールを弾いてしまった。

海が体勢を整えようとするや否や、目の前に香が飛び込んでリバウンドを取っていた。

「海、アウトが崩れるんじゃないや。今度教えてやるよ。アウトの外し方とかよ。」

取ったボールを、椎へパスする。

「ああ。今のは、後で。」

香が自分たちのゴールへ走っていく。その後を海が追いかける形となる。

「香は上手いからね。いろんな事知っているよ。」

「恵ちゃんも上手いよう。香ちゃんもすごいねっ。」

優がドリブルを突きながら話す。話している隙に抜こうとするが、いつも正面のコースを通ってなかなか抜かしてくれない。

またまた、すごいディフェンス上手いなあ、と思った。

優が攻めあぐねていると、椎が恵に気づかれないように恵の横に密着した。

「ナイス、スクリーンだよっ!」

スクリーンプレーはどうしてもマークマンを外さないといけなくなつた時に使うが、成功確率が本当に低いんだよね。

成功すればプレーの幅が広がるけれどね。

スクリーンって何?という人のために後書きで説明を加えておき

ます。正直自分、説明下手（汗）。

椎が、優のドライブに付いていこうとする恵を邪魔する壁役となる。椎の存在に気付かなかった恵は椎にぶつかり、マークマンがいなくなった優はそのままゴールへ行こうとした。

「スイッチ（自分のDFマークマンを交換すること）、オツケー。」
椎についていた遙が、優を止めようとした。

左右へとドリブルで振り、ついてこれなくなった時、大きく右へドリブル。

そのままボールを上へ持ち上げると同時にシュートフォームを作り上げ、そのままゴールへ放つ。

ゴールに対して真っ正面の3ポイントシュート。

優が一番得意なポジションのシュートはパサツという音と共にバスケットを揺らした。

5-0。

第5ピリオド：Trun Over（後書き）

最近、リトルバスターズにはまっているせいかなかなか時間が無い・
・・。

これからもよろしく願いします。

第6ピリオド・Pass And Run(前書き)

リニューアルして新しいシステムになったので、まだ不慣れです。
そんな訳で(どついう訳だよ!!)、更新します。

第6ピリオド：Pass And Run

「次からスクリーンしてくる時、『スクリーンくるよ』って言うてね。」

「ごめん。」

「もっと、活躍、したい。」

シュートを入れられた後のスローインの前に、恵達3人は確認し合う。

今度は恵1人でボールを運んでいく。遥が海とゴール下で話し合う。

「香にスクリーンかけるから、椎とマッチアップして。そのままセントアップレイに持ち込んで。」

「おーけー、分かった。」

遥は一旦3ポイントラインまで出てきた。

椎に作戦をばらさないようにするために。

恵と優のマッチアップ。

恵が抜こうとするが、なんとか追いついてコースに入り、また逆側をぬこうとし追いつく。

「1対1強いね。」

ちゆるん、という汗で滑る音と共に優がボールをつかんだ。

「椎ちゃん。」「お前、思いつきりラインでてるぞ。」「えっ？」
優が見ると、ボールがラインを超えてしまっている。

つまり恵たちのボールとなってしまった。

「ナイスファイトだったぜ。」「ディフェンス集中すつよ。」

2人が優に手を差し伸べて、その間に他の人は、コートについた汗を拭くためモップを急いで持ってきた。

「すごいねえ、優は。」

感心しながら拭いている。

「じゃあ、恵ちゃんたちからリスタート（再スタート）だねっ。」
拭き終わった恵にボールを預ける。

「よし、始めるよ。」

恵の声からゲームスタート。

遙は椎を押さえ込み、ミート（ボールをもらうための姿勢。ボールにmeetする。）しボールをもらう。

そのまま香の右前でポジションをとる海へ。

右足を軸にしてターンシュートする。香がボールをはたき落とすために手を伸ばす。

が海の右手にだけ当たってしまった。

女子のシュートフォームは普通両手で放つボスハンドシュート。

しかし海の場合、ワンハンドシュートをする。

少しだけ打点が高くなりブロックされる率が減る。

今まで香は海がボスハンドシュートをすると思っていた。

さつき得点になったシュートの時はスクリーンにかかっていて、正確に見ることが出来ていなかった。

海の体勢が少し崩れたがなんとか入った。

「やっべー!!!」

香が焦る。

今のシュートがカウントされ、6 - 4。1スローを入れられたら困る。

「ふう。」

海がフリースローラインに立ちリズムを整えるためのドリブルをする。

優と同じぐらい綺麗なフォームのフリースローは少々リングに当たったが入った。

6 - 5。

「どっしょー!」「まだ大丈夫だろうよ。1点勝っているわけだし。」

椎がなんとなく時計を見た、そして気づいた。

「俺らまだ昼飯食ってないじゃん。」

昼休み終了まで25分。

少なくとも食べ終わるまでに20分かかってしまう。
それに月刊バスケット最新号読んでないし、というのは遥談。

優たち4人は、昼食を体育館へ持ってきていない恵と香と一緒に、
お昼を食べるために一旦各自のクラスに戻ってから4組に集合した。
「毎日やっていたんだ。なんで部活に入らなかったの？」
恵の質問に海が答えた。

「部活の、バスケットは、好きじゃ、ないから。」

「そーいや、おめえどこ中だっけ？」

「月野中、」

「あの中学って強いよね。県大会にも出てるし。」

「それほどでも。」

6人は昼休み終了まで喋って、食って、ついでにみんなで月刊バスケットを読んだりした。

「明日もこの6人でバスケットやるっ。いいかなあ？」

「うん。」「いいぜー。」

優の提案は全員一致となった。

「明日からもよろしくっ。」

翌日、椎が1枚の紙を持ってきた。

他の5人に見せつけるようにしながら言った。

「この大会に出ねーか。」

その紙に書いてあったのは、「第10回明水市民チームバスケットボール大会」とかいふ県主催の市民大会に関することだった。

その紙の内容は明水市総合体育館を貸し切ったの開催、
男女は別となる、5対5のゲーム、1位から4位までは表彰される、
とのこと。

さらに最終日の3位決定戦と決勝戦は10分×4ピリオドゲーム、

それ以外は2ピリオドとなっているらしい。

「夏休み中はどーせ暇になっちゃうんだろ？みんなやるうー！」

椎の大会参加表明にみんなも「」「」出たい。「」「」と応える。

みんな本当に暇なのか、それともバスケットをやりたいからなのかは知らないが6人全員で参加することになった。

「じゃ、電話で応募しとくわ。また後で。」

そう言つて、椎は去つていった。

その後、椎が県バスケット協会に大会に参加するということ伝えるために電話した時、協会の人から聞かれた。

「チーム名は決まっていますか？」と。

「まだ決めてなかったんすけど。」

「一度相談して決めてからまた電話してもらえますか？」

「はぁ、分かりました。」

電話の後、椎が一言。チーム名、何にしよう？

第6ピリオド：Pass And Run（後書き）

閲覧は前の方が良かったな、とか思ってみたりしています。
しばらくは週1で更新していく予定です。

第7ピリオド・Fast Break (前書き)

なんとか更新できました。

第7ピリオド：Fast Break

6月1日、月曜日。今は丁度昼休みが始まって5分ぐらい立った頃。優たち6人は体育館の中でダッシュをしている。

昼休みということを除けばなんら部活と変わらない光景となっていた。

「ふう、やっと3周だよ。」「スピード、落とさずに。」「へばるの早えーよ!!」

体育館をステージ側、玄関側と2分割して、6人は玄関側にいる。その玄関側コートいっぱい大きく走っている。

みんな疲れてきているようだが、スピードが落ちてきているようには一般の人から見たら思わないだろう。

この6人、つい4月にあつた体力テストでは驚異的な記録をつくりだしている。

なかには男子を負かすほどの数字をもつ人も。

一番スピードが遅い遙でも50メートル走で8.0秒だった。

ちなみに遙、握力が学年ナンバーワンだった。

話を戻すとなぜ部活に入っていない6人がこう走っているかといえば、全員で県主催の市民バスケット大会に出場するため。

さらに発案者の椎が、どうせやるなら優勝しよーぜい的な事を言ったから。

みんなで話し合ってます、走る力（スピードと持久力兼ねて）をつけようということになった。

でひとまず全力で5周走り切ることを目標にして今実行中という訳。「はふーっ、ちょっと疲れちゃったっ。」「何言ってるんだよ。これ

からだるーが。」

トップに優と椎がゴールする。

みんなが走り終わった後、つかの間の休憩を取り海と遙は香からセンタープレイの技術を教わることにして、椎と恵は1対1をやって

残りの優は3ポイントシュート練習をしている。

「ゴール下まで押し込むのはいいけどよ、それからゴールだけ見てちやダメなんだぜ。」

香がセンタープレイについて説明している。他の2人よりいろいろと動きがうまい。結構参考になる。

「ターンをしてそのままシュート、じゃなくてゴールとは別の所へシュートフェイク、」

実際に香がやってみせる。

「マークマンがブロックしよとすんのをかわして、一步ゴールに踏み込んでシュート。ぜってーブロックされねえよ。」

海にボールを渡す。そして香を背にゴールの近くまで行く。そのままターンするが香の教えに習ってリングより少し右へ打とうとする。香がブロックしようとジャンプした事を確認してから踏み込んでシュートした。

「相手なんかゴールに背、向けてっからリングの正確な位置なんてわかんねえからよ。」

「なるほど、頭いいな。」「私もやってみる。」

今度は遙が挑戦してみる。

椎が抜いていく。ドリブルしているとは思えない速さ。

そこに恵が追いつく。クロスオーバーして逆方向へ抜こうとするが恵がコースに入り抜けない、いやむりやり突破しようとして恵と激突。

恵を押し倒してしまった。

「痛たた、やっぱり抜くのはすごいんだよ、でも抜いた後が肝心。相手が追いかけづらくさせるコツがあるんだよ。」

「コツってあんの？抜いてもすぐにも戻られちゃうしよー。」

「抜いた後に、ディフェンスの真後ろラインに入ればいいよ。」
つまり一本道を想像した時に途中にある障壁「ディフェンスを避けて」抜いて、

また元の道に入ればディフェンスはただ真つ直ぐ追いかけたのではオフェンスの進むコース正面に入ることが難しくなる。
試合中とかでよくあるファールの1つだな。

「あんま気づかなかった。」
そう言うて恵に向かって歩き椎が恵の横をすり抜けて、また元歩いていたコースに行く。

「こうすると付いていきたいディフェンスがよくファールをするよ。」
一言付け加えてまた1対1の実践練習を再開した。

回転がかかったボールをミートキャッチし、その時にシュートフォームを作っておく。

そしてシュート、のフェイクを1つおいて再びボールを上へ持つて行きショット。

スナップがかかってリングを通過したボールはまた自分の所へ帰ってくる。

またキャッチしてシュート体勢、それからドライブしコーンが置いてあるフリースローラインまで行ったらストップしジャンプショット。

なんとか入ったが、一回リングのつなぎ目に当たって上へ跳ねてから入る。

「ふう、ストップはきついなあ。」
優が息を整えながら言う。

「今まで3ポイントしか打ってなかったよう。」
優の3ポイント率はほぼ100%に近い。マークマンの外し方もうまいので試合中にはそれなりに打てた。

しかし3ポイントかパスか、の2択しかあまり考えてなかった。
先日、

「優はシュートだけじゃなくてドライブも覚えた方がいいと思うよ。」

恵にこう指摘された。

恵ちゃんはいろいろ凄いなっ、みんなのこと把握しているし。私もなりたいな！それが優の本心だった。

それぞれの練習が終わる頃には昼休み残り20分になっている。

恵と香が入ってから後は後に昼食をとるようになった。

もう片付けしまいと食べる時間がない。

最後に全員でストレッチをし、着替えて4組に集まる。

「そういえば大会に参加するチームってどれくらい？」

「分かんねーけど20ぐらいは集まるんじゃないか。」

「今度総合体育館に行ってみつか。」

「結構、遠いの、かな？」

「今度調べておくよ。今週の末に行ってみよ。」

恵の提案で明水市総合体育館に行くこととなった。

そここう話しているとチャイムが鳴りだした。

「やっべっぞ、じゃーな!!！」

「また、放課後。」

と、他のクラスへ戻っていった。

「大会って始まるの何日だった？」

「あのチラシに7月28日からだってよ。」

香が席を立ちながら言う。

「あと約2ヶ月ってことだねっ！」

第7ペリオド・Fast Break(後書き)

これからもよろしく願います。

第8ピリオド・Block Shot(前書き)

いろいろと学校行事があつて更新が遅くなりました。では逝きます
(笑)

第8ピリオド：Block Shot

5月27日、放課後にメンバー6人は4組に集合していて話をしていた。

チーム名を考えないと大会には参加できないからである。

「フーわけでなんか提案あるか？」

「私達のチームカラーって何色だっけ？」

「みんなの、バッシュが、ほとんど、赤。」

「じゃあ、赤・レッドってつけようよっ。」

「それだけじゃチーム名にはなんねえだろ。」

なかなか意見がでてこないから決まらない。

「そんじゃ、また明日朝にここ集合ってことにしようぜな。今日中になんか1つでもいーから考えてこいつて事で。帰るぞ、放課後バスケの時間が減っちゃうぞ。」

香が締めてこの話会は終わることにした。

いつもの、中学校でやるバスケ終了後、優は帰り道にある本屋へ立ち寄っている。

スポーツ雑誌コーナーへ行き月刊バスケ最新号を読んでいる。

「やっぱり全国大会ってすごいなあ。」

写真にはMVPを獲得した選手が載っている。

記事には1対1からのドライブインできてからのプレーがすごいとか書いてある。

「すごいドライブインだよっ。止められないねっ。」

ドライブする人ってドライバーって言うかなあ？、と考えた。

「赤色のレッドとドライバーをくっつけたらカッコいいな。明日椎ちゃんに提案してみよー！」

翌日、昼休み、体育館へ移動中に昨日考えたチーム名を伝えた。

「レッドとさ、ドライブする人って意味のドライバーを合わせたらいいと思ったのっ。」

「それで結局名前なんなんだよ？」

「レッドドライバーってどう？」

みんな、それでいいと思うよ、かつこいいじゃん、と言ってくれた。今ここにチームレッドドライバーが誕生した。（少し大袈裟な言い方だが。）

この昼休みが終わった時にもう一度、県バス協会で電話してチーム登録を終えた。

なんと参加チーム数が25を超えたらしい。

あと、

「チームでナンバリング（ゼッケン）か、ユニフォームを持参してきて下さい。」

と協会の人が出ていた。

6月6日、土曜日。レッドドライバーの6人は明水市総合体育館の最寄り駅、明水駅に集合していた。

体育館への行き方調べ、どうい風な会場が見学するためである。

「暑ちいなあ。」

香がぼやく。

「確かに、6月で、この暑さは、異常。」

「ちよつと飲み物買ってくる。」

「俺も行くぞ。」

「早くね。」

4人がドリンク補充しに行ったため、優と恵が残った。

「体育館までどうやって行くんだろっねっ？」

「しばらく真っ直ぐ歩いたら着くっさ。」

恵が携帯で行き方を調べているようだ。

「そっいえばなんで恵ちゃんバスケット上手なのに部活に入らなかつ

たの？もつたいないよう。」

「いや、実はね…」

恵がいた中学のバスケット部は県大会出場の常連校だった。たまにベスト4に入るほど。

彼女は県の中で選抜された人で構成される県代表チームに選ばれたりするほど強い選手。

しかし顧問の方針がひどく勝つためならなんでもやれ、というものだった。

小学生の時に入っていたバスケットチームでは楽しくやること、日常生活の一部がバスケットだ、という考えだった。

恵はその違いに苦しんだ。

引退の時にもう部活でのバスケットはやりたくない、楽しく自由にやりたい、と思った。

「香も同じような事情で部活入ってないんだ。」

優たちに出会えて良かった、一言付け加える。

「すごい訳があったんだね。」

優がもう一言言いかけた時に4人が戻ってきた。

本当に駅を出発してから真っ直ぐ行くこと15分。

”明水市運動公園”と書かれてある看板にたどり着いた。

どうやら体育館は公園内にあるらしい。

「おいっ、プールがあるぞ！」「テニスコートもあるし。」「かなり、広いな。」

さまざまな種目ができるようになっていて有名となっている。

「ねえ、体育館入り口の近くにバスケットゴールがあるよ。」

遙が指を指す。

入り口のコンクリートフロアの端に1個設置されていて、今も小学生が、楽しそうにプレーしている。

体育館内は1階がコート、2階が観客席となっている。（殆どの体育館はこのタイプ）

6人は2階へ上がり、上からコートを見下ろす。

「うわっ、広いねっ!」「なかなか、良い所。」
「ここでやるのかあ。」「冷房入っているよ!」

冷房付きの体育館はあまりない、故に珍しい。ちなみに寒くなると暖房も入るとか。

「コートの色が分かりずれえんだよな。」「荷物つて大会ん時、どこにおくんだろーな。」

それぞれに感想や言い分があるようだ。しかし設備は本当に充実してる。問題点といえば、

「駅からかなり遠いから歩かないといけないんだよね。」
距離の問題。

椎が、

「まーアップ程度にはなるじゃん。走っていきゃあ体育館ついてから走んなくても良いわけだしよ。」

と発言したために他の5人は、それは違うんじゃないかと聞いたけど、たが歩かないといけないので、この際どうでもいいということに落着いた。

ちなみに公園前に留まるバスがあるけど料金が高いから、という理由で乗らないことにしているのは補足。

6月19日、金曜日。

6人は放課後、4組の教室で雑誌をみんなで見ている。

その雑誌、正確に言えばパンフレットなのだが、ここらへんの地域で一番大規模を誇っているスポーツグッズ店が無料配布している

『バスケットボールチームのユニフォームのオーダー承ります。』
というものであった。

ついこの前大会への参加表明のために県協会へ電話した時にユニフォームかゼッケンが必要だと言われてから、椎が今日その事を思い出したのである。

そしてこれから、

「ユニフォームとか決めつから放課後集合な!!」
と言うわけである。

パンフには様々なデザインや色のユニフォームが載っている。

「チーム名がレッド入ってるから赤色だよねっ?」

「当たり前じゃねえ?」

「あとはデザインだけかな。」

恵が一点を指す。

そのデザインは一面赤色、チーム名と番号の所は黒色となっている。
首周りと脇周りに黒いラインが引かれている。

「こんなのどうかかな?リバーシブル(裏返ししてもユニフォームとして使える機能)になっているし、かつこいいと思うよ。」

「黒だと番号とか目立たないじゃん。白とか。」

「じゃー白タイプにすっか。みんないいよなあ?」

かくしてユニフォーム決めは早くも終わった。

「サイズとかどうする?」

いや、遥の一言で終わらなかつた。

「身長で、決めたら、どう?」

「そうしようかな。」

パンフには、サイズは10センチごととなっているらしい。

優が130センチサイズ、椎と恵は160センチ、香と海、遥は180センチサイズとなった。かなりデカイチームだな。

「番号とか、どうすれば?」

「皆、好きな番号をどんどん言っていけばいいよ。」

この後の話し合いで番号が決まった。

まずは誰がキャプテン(つまり#4)を着るかどうかだが、すぐさまリーダー性がある海となった。

椎が#7、恵は#6、香が#8で遥が#5、

優が1人だけ2桁数字を好んだ、#15。

今度こそ本当に終わった。

「明日でも店に行って注文してくるわ。」

「ありがとうっ。」

月が変わって夏日が続く7月3日、金曜日。

午前中の授業が終わり体育館へ集まっていたメンバー6人は、椎から手渡されたチームのユニフォームのできにそれぞれ感想を洩らしていた。

「すげえ真っ赤で目立つなこれ!!」

「レッドドライバーの文字が英語になっててカッコイイな。」

「白面（裏返した面）の文字が赤とかすごい。」

「ちよつと大きいかなあ。」

「優、小っちゃくて、かわいい。」

とか。

胸あたりには『RED DRIVER』の文字が!!想像しただけでかっけえ。」

「無くさないようにしとけよ。」

大会まで1ヶ月を切った。みんな何を思い、どう戦っていくのか？

第8ペリオード・Block Shot(後書き)

金曜日の予定です。

第9ピリオド・24second Over Time (前書き)

やっと更新が来ました。

第9ピリオド：24 second Over Time

7月28日、レッドドライバー6人は直射日光が当たる中、明水駅を出て真っ直ぐ北上、いや明水市総合体育館目指して歩いている。大会1日目。

体育館につくとまだ開館されていない入り口に人だかりができてい

る。

入り口の横に
『第10回明水市民バスケットボール大会』
などど書かれている看板が設置されている。

「ついにこの日がやって来たあ〜！」

「すごい、テンション、朝から。」

「楽しみだね。」「開演まだかな。」

体育館の管理人だろうか、鍵を開けてくれた。
まず入った所に受付スペースがありそこで手続きをしなければいけないようだ。

6人が入った途端、係の人に「どのチームですか」とか聞かれて、
大会参加申し込み者の椎が答えていた。

5人の所に戻ってきた椎の手には何枚か用紙があった。

「この5枚束になってきたやつがメンバー表で、名前とか書かねーといけねえんだよな。でこれがここの見取り図、最後のが対戦表だつてよ。」

「じゃあ最初の対戦チームってどこかな？」

「あと時間とか。」

対戦表には、最初のゲーム開始時間は9時ジャスト。それから50分間隔で2試合以降が開始されると書いてある。

ちなみにレッドドライバーの試合は真ん中のコート2試合目（予定時刻9時50分）らしい。

相手チーム名は「リング・アウエーズ」というチーム。

更衣室に入った6人はただ今着替え中。今日は白色の面（赤文字）で試合をする。試合時間まではユニフォームの上にTシャツを着ておく。

「チーム数多いな。」

「27もあるんだよねえっ。」

市民大会規模なのに女子チームが27も参加するというのはかなり多い方にはいるのではないだろうか。

更衣室も女子だけで4つ使っている、というかこの体育館はどこにそんなスペースあるんだろう？

「ウォームアップどこでするの？」

「2階の観客席周りに走るコースあるらしーぜい。」

「早く行こっか！」

6人が走りだしていく、みんなでお揃いに買った赤をベースとしたバスケット用シャツを着て。

真ん中のコートで行われている第1試合終了3分前。

6人各自が飲み物、タオル、屋内用ボール、その他携えて真ん中コートに通じる扉の前に座っている。

「緊張してきた。」「とにかくやれるところまでやってみようぜ！」

「できれば、勝ちたいね。」

6人でストレッチを一通り終えた時、試合終了の笛が鳴った。試合と試合の間に5分間のアップタイムを設けてある。

試合開始まで5分を切った。

今日は6人各自の体育館用ボールを持ってきている。その中から赤と白の2色ボール（香のボール）を取り出して、ハーフ3対3をやり始める。

「いくよつ、海！」

「ナイスパス。」

「香、大丈夫かあ？」

体が温まっついていき、同時に緊張も高まっついていく。

「ラスト！」

最後に打った3ポイントシュートが決まった。

「集合、しようか。」

ついに集合がかかる。

「じゃあ俺はメンバー表、提出してくつから。」

「スタメン（最初の5人）誰になるの？」

恵がふと思いついたように言う。

結局ジャンケンで決めるといふ形になった。優以外の5人に決まる。

「優は私と前・後半で交代しよう。」

「うん、分かったよ恵ちゃんっ！」

「なんか雰囲気悪かったらタイムアウト取ってもいいぞ。」

「おーけー。」

シャツを脱ぎ、ベンチに置く。そして全員で円陣を組む。

「じゃ、行こうか。」

「……うーっすー!!」「」「」

これから10分×2の戦いが始まる。

「白の番号は、4（海）、5（遙）、6（恵）、7（椎）最後に8番（香）。

青の番号は、4、7、8、12、15番。それでは試合を始めます。礼!!」

センターサークルの中に海と青4番が入ってくる。

相手は全員見た感じ、大学生か。髪を染めている人が多い。

4番、身長180はありそつだ。

「よろしく、」

「こちらこそ。」

ジャンプボールを奪ったのは相手チーム。

取ったボールをすぐさまゴール下へ走っていた7番にロングパス。

そのままゴール下シュートを打たれ、2点カウントされた。0-2。

「さあ、一本取り返そう。」

恵が1人で運んでいきながら、相手はハーフマンツーマンディフェンスだなと分析している。

ボールをもらいに来た椎へパス、と同時にもらった椎がゴールへ突っ込んでいく。

椎のマークマン、7番を一步目で抜き去る。

「なんか強えディフェンスいねえかな。女子相手じゃいねーな。」

カバーしてきた15番がシュートブロックをしてきて、フリーになった香にパス。

フリーになりシュート体勢に入ってた香へとパスが、渡らなかった。

「8番のカバー、OK。」

スイッチした7番が香へのパスをスティールし、速いドリブルからの速攻パスを、

遙のマークマン、12番へ。

速攻を食らって0-4とされた。

「このままじゃ、危ないね。」「3人のセンタープレイを使っているか。」

恵と椎がボールを運びながら相談する。

「3人に思いつきりプレイさせてあげよう!」

ゴールに対して45度にいる遙へ、そして15番を背にしている香へ。

「思いつきり行けええ!!」

恵の声が響く。

もらつと同時に右足を軸にリアターン（スペースを作れるターン）

しそのままシュート。

シュートをフリーで打つスペースがあつたにも関わらず、

香と同じぐらいの身長か、

15番の人差し指にチップし回転、同時にボールの軌道がずれていきリングに弾かれる。

リバウンドを獲りにいこうとするが相手のスクリーンアウトがなかなか強固。

それを横から抜け出し、前のポジションをとる。

が、ボールはリングから大きく弾かれたのか、後ろへと飛んでいってしまう。

逆に相手から、ボールをとりにかせないためのスクリーンアウトをしてくる。

「シュートはずして、それでリバウンドも獲られるなんて嫌だぞお！！」

香はそう思った。

初ゴールは自分が、今決める。

しかし、相手の方がうまい、けど、勝ちたい。

ボールが15番へふれる前に海がボールを奪い返した。

ゴール下のシュート、フェイクで4番をかかわす。

「行け、決める。」

フリーになった香へ文字通りの手渡しパスが渡った。

シュート体勢になったと同時に後ろから

「チエーツク！！」の声と共に15番の腕がぶつかった。

危なっかしくもリングを通過。ファールの笛が吹かれる。

バスカン、1スロー、レッドドライバー初ゴールの2-4。

「ナイシューだよ香！！」この調子で、一本。」

「みんな、サンキューなあ。」

フリースローレーンへ並びに行く。

中学の時、みんなよりデカかった私は1年の時からレギュラーだったんだよな。

1年で168あったんだ。

センター以外やらせてくれなかった。

リバウンドとゴール下の得点量産。それだけだ。いつも監督から言われ他の、例えばスクリーン役になるうとした時も殴られ、リバウンドを1本でもとれなかつたら平手が飛んできた。

1発殴り返したくなつた時が、あつたんだよな。

最後の夏大会。県ベスト4で敗退したとき、全部でめえのせいだ、と怒鳴りつけられもう部活には顔みせるな、と言われた時いつの間にか監督の目の前まで拳が出たんだよな。

高校になつたら、ぜってーにやらねえ。思った。

痛いのもうゴメンだ。でも別の世界があつた。

今はみんな5人がいる。追い風が吹いていく気がすんだ。

そう感じながら1スローをゆっくり、そして打点をたかくのびのびと放つ。

第9ピリオド・24second Over Time(後書き)

最近ようやく執筆活動が再開できました。これからもよろしく願
いします。

第10ピリオド：Time Out（前書き）

最近、本当に風邪引いたと思うぐらい、体力が落ちてきました。治つたら走り込まなきゃ、ね（なにが1ヶ月ぶりの更新逝きます。

第10ピリオド：Time Out

「リバウンドOKだ。」

「前いれさせるな。」

リバウンダー同士の声が掛けられあう。

しかしその声を無視するかのようにネットに絡むようにしてカウントした。

3 - 4。

この後、前半戦が残り1分になるまで接戦が続き、28 - 29。途中で7番が6と交代したりタイムアウトを取ったりしていた。

「6番すごいね。椎、もうちよつとディフェンス強くしてね。」

「ああー、あんな速い人久々だ。」

そういえば遙は1点も入れてない。

リバウンドは量産しているが12番の方が少しデカイ。それもあるかもしれないが。

ディフェンスから始まった。1点差がついているので、相手はゆっくり確実にパス回ししてくる。

24秒ギリギリになる前、残り2秒でミドルシュートを打ってきたリングに大きくはじかれたせいかな、外にいた6番にリバウンドが渡った。

「チエック！」

椎がチエックしにいくが相手はフェイクで交わし中へ切り込んでくる。

「6番いいぞ〜！」

香のカバーでシュートさせるのを防ぐ。

その時フリーとなった15番は3ポイントラインへ向かっている。

「スクリーンかけるよ。」

チェックしにいこうとした遙に対して12番が邪魔してきたせいで、ボールをもらった15番へのシュートチェックが遅れてしまった。

「ごめん！アウト！！」

遙の声に反応して全員「いや、ある1人だけ除いて。

ボールはリングを通過した。一瞬ひやりとした遙だったが、結果的に3ポイントシュートかと思われたシュートは、2ポイントとなっていた。

残り33秒。

命拾いしたな。

「椎ー！！」

先に1人だけ走っていた椎へスローインパスが投げられる。逆転してやる。見せ場はここぐらいだ。

ゴールに対して真つ正面からスピードを全く落とさずに突っ込み、激しくリングの中でボールが廻る。

残り29秒。30-31。

「プレスかけるよ。」

恵が全員へ指示をだす。同時にスローターの8番に対してパスコースの制限を大きくかけた。

12番が遙のディフェンスを振り切ってボール受けにいこうとするのを椎がカバーしてあげている。

「遙ー、しっかりるよな。」「うん。残り時間少ないよ。」

2人が声をかけあっているせいか、相手のスローインが入ってこない。

もうすぐ5秒ルールになり自分たちのボールになる、

そう一瞬の油断かスローインをいつの間にか入れられてしまった。時間が過ぎていく。中-外-中のリズムで時間が使われていく。

フリーの所へパスを入れられてもシュートを打たない。

故に海や香が身長高くてもブロックできない。

24秒タイマーが鳴ると同時の3ポイントシュートが外れリバウン

ドを、

この10分間で16リバウンドをマークしている遙が保持。

この時点で残り5秒。

そのままドリブルで運び2秒で、3ポイントラインより2メートル離れた所から投げる。

リングに当たると同時に前半終了ブザーが響いた。

30-31。

最初にジャンプボールを奪われたから、優たちレッドドライバークからのオフエンスで始まる。

さらに攻めるゴールが入れ替えとなるコートチェンジ制がある。

「意外に10分って疲れるなあ。」

「飲み物ちょうだい。」

5人が椅子にへこたれる。今まで5対5の練習をしてきてこなかったのが理由かも。

「優ー、後半交代ね。」「おーけーっ。」

ちなみにハーフタイムは2分間。優たちにとっては短い。

「ちっ、相手チームもう出てきてやがるぜ。」

疲れた。勝てるかな。5人は共通的に思った。しかも、

「相手、全員交代、したみたい。」

見た目で一番でかい9番はさっきの4番よりセンチぐらい高い。なぜ、こう高い人がこんなにいるチームなんだろう？

海が頭にタオルを被せた状態で考えていた。

恵は優と優のマークマン、5番との身長差を測定していた。

相手は150は少なくともある。対して優は125しかない。いろいろ大変だろうな。という結論に至った。

ハーフタイム終了。

「青は全員交代。番号は5、9、13、14、最後16番。白は15番が入った。」

審判が確認していく。

10人がコート内へ入る。

優からのスローインで始まった。

椎がパスを受ける。

「ボールちょうだいっ！」

優がターゲットハンドをだしディフェンスから離れながらボールをもらう。

次に右へドリブルカットインをしようとし、相手5番が後ろに下がったのを確認してから

バックし3ポイントラインへ戻る。

勢いをつけて3ポイントをショットする。

優の十八番3ポイントはリングに当たらず入った。

「やった〜！」「ナイスユ〜だったぜ。」「相手来るよ。」

ハイタッチをしながらそれぞれのマークマンへ付く。

「ここ一本ディフェンス!!!」

ベンチにいる恵から声がかかり、それに応えるかのように「オーオー!!!」

の掛け声とともにプレスディフェンスを仕掛け始めた。

さつきより身長が大きくなっている中3人にボールが渡ると危ないー。

優と椎が2人がかりでスローインレシーバーの16番へのパスをカットしようとして密着する。

「かつ、苦しい。」

「どーだっ、2人ディフェンスはあ。」

危うく外されそうになった所で笛がなり、5秒ルールを示した。

「よっしゃあ。」

「これ、ちよつと疲れるねっ。」

他の3人も戻ってきたのを確認してから椎がスローインを入れた。

ゴール近くですぐにシュートするために海と香が互いにスクリーンをかけマークマンを外そうとしているが相手がスイッチを繰り返しているのではなかなかフリーにならない。

「優！」

遙が優のマークマン、5番に気づかれないようにスクリーンセット。

「ナイスツ！」

スクリーナーとなっている遙に少しぶつかるといらいストレスに通った。

「パスカットしろ！」

慌てて13番がコールしたが、すでにボールは優の手に。

「ふう。」

一呼吸を置いて、その間に5番が飛んでくるがブロックは当然失敗、素早く打った。

一直線にゴールへ飛んでいき、

いつものように入る。

「やっぱしすげえ。」

仲間が声をもらし、

「15番ヤバイ。」

また相手も思わず感想が口から出る。

優の連続3ポイントシュートによって点差がさらに離れていく。

36 - 31。

第10ピリオド：Time Out（後書き）

次の更新は年末年始頃です。

第11ピリオド：Free Throw（前書き）

大更新が遅くなつてすいません（苦

いろいろと新年入つてから慌ただしく、勉強も部活も真面目に両立していかないといけない日々を苦闘しました。

まー、でもそろそろ更新しないとマズイと思うので（なんで？

更新行きまーす！

第11ピリオド：Free Throw

相手はとうとう14番を含めた3人でボール運びをする始末になった。

14番は元々、ゴール近くで仕事をして来たから、運ぶコツがあまり分からなかった。

そのためか、14番はポジションをとる動きからのもらい方しかしてこない。

香がパスカットをねらうディフェンスへと変えていく。

相手のポジジョン取りは香よりうまい。が、

「前獲ったあー!!」

スピードで対応し1回目のステイルをする。

そのままオフエンスモードに切り替わった椎がいるコーナーへパス、

「ゴールサイドもらった!」

コートラインギリギリを抜いていく。

「たあー!!」

そのままバックシュート、の前に椎に対して5番がディフェンスカバーしに来たのを見逃さずに、

右手だけで優へとパスをだす。

「チエツク行くぞ。」

優の所へ14番がブロックしに行く。

優の身長125。相手は178。

どう見てもブロックされると皆思った。

俺も思った。

14番の手の高さにボールがくるまでの、驚異的なジャンプをした後右手だけのワンハンドシュートを放った。

14番は右手だけでブロックしに来た。

普通の女子ならボスハンドショット、両手で打つためにブロックは右手だけでも当たる。

無意識にそうしてしまったのだろう。

しかし優には効かずに、

ゴツッ。

という音と共に笛が鳴った。

審判がファールサインをしている時もボールは空中にあり、

驚異的なジャンプをしてもやはりいつもどりの優だったらしい。

もちろんという風に3点をカウントした。

なんなんだ、あのジャンプ力に加え3ポイントシュートの正確さは

14番、本田 流は、フリースローの準備中にそう思った。

このチームは高さが売りだ。ゴール近くのオフENSEを困らせ外からのシュートリバウンドを奪い、速攻へのパスを出しガードの人がファーストオフENSE。次に高さで勝負し決める。

このチームのスタイル。

しかし向こうのチームにはすごいとしか言いようがないシューター。

1対1が上手い人。

パワーより細かい技術をもっているセンターや壁としかいいようのないパワーフォワードまでいる。

高さだけじゃ勝てない。

そう感じて、

「タイムアウト、お願いします。」

テーブルオフィシャルに頼んだ。

「うんっ。」

手首を回しながらフリースローボールを受け取り、リズムを整えるためのドリブルをしないでいきなり打った。

「リバウンドいくぞっ!!」

「自分たちが、獲る。」

海と遙がリバウンドに入りに来た9番と13番を食い止めた。
1点が入る。

ブザーが鳴り相手、リングアウエーズのタイムアウト。

「はあ、はあ。」息切れがまだ激しい優に、

「優すげーじゃねえか。」「始まったばかりだし、ゆっくり休んで。」

香と遙が声を掛ける。

「まだ勝った訳じゃないよっつ。」

「ま、そうかもね。」

海がそう言いながら相手ベンチをなんとなく見て、

「相手、なんか、やってくる。かも。」

「なんで？」

「縮こまって、話してる、から。」

遙は自分がまで1点も取っていないことにちょっと悔しがっている。

「シユート決めたいな。」

タイムアウト終了ブザーがなり、コートに出て行く。

香のマークマン14番に代わって4番が、優のマークマン5番が7番になった。

それからの5分間は、相手の作戦が功をなしたのか、それともベストメンバーになったのかは分からないが、

優が1本も3ポイントシユートが入らず、身長+スピードで海や遙のスクリーンアウトをかいくぐっていった。

「相手が交代してからヤバイなあ。」

椎が思うも良い策が浮かばないまま時間が流れていく。

「リバウンド！」

優が外で声を出す。

が、また奪われてしまった。

優は急いで戻ろうとするがすでに先へ相手、7番が走っていた。

「くっ。」

レイアップを決められボールがコートに跳ねた頃に優が戻っている。相手の身長や能力が高まった他に原因がもうひとつ。

20分乗り切れる持久力がない、

またはペース配分がなっていないのが理由だった。

残り2分45秒。48-54。

優達のオフェンスだった。

体全身に疲労が溜まっていく。動きもスピードも遅くなっていく。

恵がベンチから立ち上がり、

「交代お願いします。」

シャツを脱いだ。

無理に椎が中へ突っ込んでいく。

レイアップへいこうとするが、途中9番に手を激しく叩かれた。

「痛てえ！」

足元が少しフラフラとしている。

なんとかフリースローラインへ立ち、1本目を放つ。

リングの縁で回り、入った。

2本目を入れた時、ブザーがなる。

「椎、交代ね。」

恵がコートへと投下された。

「みんな、とにかく落ち着こ！」

恵のマークマン、16番にボールが渡っても慌てずに指示、いや声を仲間に伝えていく。

16番がドリブルをしながらパスをする相手を探している、

ボールから意識が離れた一瞬でスティールする。

このカットする音がいい。

スパツという手に収まるような感覚。

「優、速攻1本!!」

言いながら前へ高くパスをする。

「おっけい、恵ちゃん。」

さっきより少しスピードが速くなった。相手と同じぐらいのスピードで走っていく。

3ポイントラインでボールが渡る。

「落ち着いてっ!」

恵の声が耳に入った瞬間、ブロックしにくる5番が近づいてくる感覚を覚えた優が、

フェイクしブロックをかわしまぐれにも5番に押されてしまいながらも打ったショットが、

バスケットに入らなかった。

笛がなりファールのコールが示される。

「あ〜っ!」

外れたシュートを見ながら優が甲高い声を上げる。

いままで外したことはほとんど無かった。中学でもフリーの時は百発百中並に入りここが正念場というタイミングで決勝点を決めることも少なくなかった。

今のが悔しかったのだろう。

「惜しかった、優。」「落ち込まないでよ。」

仲間の声と共にフリースローラインに立った。

3ポイントラインで起こったシュートファールにより3本のフリースローが与えられた。

残り2分23秒。4点差。

優は近くより遠い距離からのシュートの方が得意だ。

1、2本目を入れる。

次の3本目のシュートがなんと外れてしまう。

「ふう〜。」

体力がやはりついていけないせいかシュート制度がかなり落ちてきた。

「リバン!!!」

外から香が声を出し、その声に奮起されたのか、

「ふりゃあ!」

の声と同時に遥がりバウンドを奪う。そして、

この試合初めての得点を、ゴール下からのシュットで入れる。

バックボードからきれいにリングへと反射した。

「やったあー!」「ナイシユー、ハル。」「いーじゃねえか。」

ハイツチが何度か繰り返された。

やっぱり一番嬉しそうなのは遥自身だろう。

そして遥の初得点と同時に、相手と同点まで追いついた。

相手チーム、リング・アウエーズは非常に焦っていた。

去年の成績は準優勝、平均身長が女子にしてはかなり高く去年優勝

チームとほぼ互角の178センチ。

今ベンチにいる14番、本田流はポイントガードの仕事もできる。

ゲームメイキングが上手いがこの試合は、175越えが3人いると

いうことでゴールに近いポジションをやっていた。

だからこそこの状態に危機感を覚えた。

1人が交代して、たった数秒の内にこうも流が変わってしまった、と。

まずい。タイムアウトをとって作戦を練り直そう。しかし、

『前後半でタイムアウトは各1回まで』

というルールがあるため取ることができない。

どうすればいいんだろう?

チーム全員がそう思っていた。

第11ピリオド：Free Throw（後書き）

次回の更新は6月上旬になります。こんどは約束守りますよ、絶対。

第12ピリオド：Transition Game（前書き）

これもどうせ更新するならばとついぞ。

第12ピリオド：Tradition Game

恵の投入が成功した、レッドドライバーはディフェンスにも活力を与えた。

海や遥のリバウンド量産や香の絶妙なセンタープレイ、恵のアシストパスやステイル、優の3ポイントシュートが光る。残り8秒のラストオフェンス。

恵のスローインから始まり、優へ。

2人で運び、3ポイントラインの中にボールが入った時に中の3人、今は海に渡る。

ついさっきのオフェンスのボール運びの際、

「あの9番と、全力の勝負、したい。」

と海から恵へ伝わった。

さっきはブロックされてターンオーバーされ63-60。

試合にはもう勝てるし残り時間も少なくなってきた。だから最後に頼んだ。

9番が背についている感触を確かめ、左足を軸に大きく回転しシュート体勢へ。

9番がフェイクにかかるのを見てシュートする。しかし僅かに指がボールに触れられてしまい横へ微妙に軌道がずれた。

リングの中へとは入らないと感じた海はすぐさまリバウンドへ飛び込む。

無理矢理9番がファールぎりぎりな行為をしながら海のスクリーンアウトを外そうとする。

外れないようにすることに意識が逸れてしまい、ボールが床でワンバウンドする。

それを、

「今日2回目っ!!」

遥が獲る。また取ったな、やっぱりすげえよ遥は。

試合終了のブザーと共に遙がゴール下で打つ。
そしてバスケットのなかに入った。
審判が2点カウントを合図している。今のが本当にブザービーター
だったと言うように。
遙、本日2本目を決め4得点あげた。

「結果、65対60で白チーム、レッドドライバーの勝ち。礼！」

「「「あざつした!!」「」」

両チームの挨拶が終わる。

チームベンチに戻る時、握手を求められていたらしい。

「お疲れさん。」「サンキユ。」

「ところで名前知っておきたいんだがいいかな？」

「宮代 香だ。」

「私は本田 流。香は結構強いね。」

「そんな事ねえって。」

「また会うかもね。じゃ。」

「おう。」

2人が別れてから6人は更衣室へと戻っていく。

「まずは1勝した！」

歓喜の声が辺りに響き渡る。

「ちよつと、うるさいかも。」

「帰りにどこか寄っていく？」

勝ったことに純粹に喜ぶチームメンバー。しかし、

「けっこう疲れたし、明日もあるから寄り道せずに帰ろうよ。」

恵が鋭い指摘をする。

その通り、2回戦の試合は明日行われ、2日空けて3回戦と準決勝
が行われる。

1回戦からこんなに疲れているには優勝など無理。

「確かに疲れたなあ。」

「じゃ、早く帰ろつ。」

着替えを済ませ、帰れる準備をし、体育館を後にした6人。

「駅まで徒歩だとかかなり長げーな。バスに乗ろーぜ？」

「お金がすごいかかるよ。」

「足とか腕とか痛いよ。」

「明日、今日より強いチームと戦うのかなあつ？」

「身長は、今日よりか、小さいと思う。」

喋りながら歩いて15分、駅にたどり着いた。

「じゃあ、ここで解散ね。」

恵の解散宣言で6人はそれぞれ最寄り駅の切符を買って、帰って行く。

最も、恵と香以外の4人は最寄り駅が同じなのだが。

>今日の各選手のスコア<

海 18点 7リバウンド 5ブロック

遥 4点 25リバウンド

恵 0点 6アシスト 14スティール

椎 13点 2スティール 3ファーストブレイク成功、6点

香 15点 16リバウンド 3ブロック

優 15点 3ポイントショット4本成功、12点

やっぱり遥のリバウンドと優の3ポイントショットがすごいね。うん。

翌日の同じ時間、同じコートで2回戦は行われることになっている。

「あつ、試合終了のブザーが鳴ったね。」

「みんな行くぞお！」

椎の掛け声に対して

「オオオオー!!」

と声を出しながらアップするためにコートへ入っていく。

6人がちらつと相手チームを見た。そして一言、

「みんなちつちえーなあ。」

思わず香が言う。

今日の相手は、

『エナジーハーツ』

というチーム。

全体的に昨日よりかなり小さい（昨日が凄いデカかっただけかもしれないが）。

少なくとも身長175超えの人はいないだろう。

そして、

「試合を始めます。礼！」

前半は優を除いた5人が出場し、海、香、それに遥が凄いリバウンドや得点を挙げていく。

前半終了時点で30-18。

遥のリバウンド数も10分間で23奪い取った。

「じゃあ交代ね、優。」

「うーん、頑張ってくるね恵ちゃん。」

ハイタッチをしコートへ入る。

後半もセンター3人組がさらに勢いを増しながら得点等を量産した。みんな、昨日より体力に気をつけながら軽く流すようにしてプレーしていく。

優の3ポイントシュート成功数がこの日は7本。

試合終了しても6人とも昨日のように疲れた印象は無かった。

結果として、77-33の圧勝勝ちだった。

遥も4本入れて50本のリバウンドを獲った。

もう神の領域に踏み込んだな、遥は。

「昨日より疲れなかったねっ。」

「あのチームは前年が準優勝だったんだってよあ。」

「俺らつてつよくね？」

「急いで、帰ろう。」

駅と体育館との長い道のりも昨日よりきつく感じられなかった。

「明日とあさつてはみんなで練習しようか？」

恵が提案する。

「明日ぐらい休ませてくれねえか？」

「じゃ、あさつて月野中のバスケットに集合しよう！」

「うんっいいよあ。」

「3回戦どこなんだろーな。」

この日も昨日と同じく駅解散とした。

「3回戦と準決勝が同じ日にあるんだよね、みんな体力持つか心配だよ。」

すでに改札の中へと入っている5人を見ながらただ1人ポツリと言った。

ようやく8月に入って、前より一層気温が高くなっていく。

もう周りはセミの音だらけ。

「暑っちーなあ！」

「なんとかなんないかな、この暑さ。」

こんな風に夏に対して抗議している内に6人、レッドドライバーは3日前に来た、もう見慣れた体育館に着いた。

受付をするのもこれで3回目。けっこつ慣れたものだ。

「なんと、重大発表があるぞっ！」

椎が拳を上げながら言う。

「んで、なんだよ発表って。」

「そりゃあ、」

トーナメント表が印刷されているプリントを見せながら、

「初めてユニフォームの赤色の面を着ることになったあー!!」

椎がいつもよりテンションを3倍にしながらか言った。が、

「それだけっ?」

「白面でもカツコイイと思うけど。」

みんなの反応はイマイチだった。

「くっ、スベったあ。」

笑いながら言うものだから本当に落ち込んでいるかは分からないけど。

結果は、2回戦と同じく相手が大きいチームではなかったから、3人の活躍が光った。

しかし、さすが2回戦突破しただけあってなかなかの苦しい展開もあった。

この日はこの後に準決勝があるので、3回戦で勝ってもまだ体育館内にいないといけない。

「なんとか勝ったね。」

「しっかしあんなジャンプ力持っているガードは久々に見たな。」

と、香が言っているのは相手チームの5番について。

中へ入れようとする高いループパスを何度かカットされてしまった。当然香の方が身長は高いわけなので、普通にポジションをとればいいのだが今回の相手ディフェンスはゾーン、しかもボックスワン（4人がゾーンディフェンス、1人がマンツーマン）で確実に優の3ポイントシュートを打たせないようにしていた。

しかもゾーンの方も中のプレイをさせないように小さいゾーンで、こちらのパスカットを狙ってきた。

椎がゴールへとドライブしてもなかなかジャンプシュートを簡単には打たせてもらえずに前半は8点差で負けていた。

後半に出てきたレッドドライバーの司令塔、恵によってゾーンを崩

した。

「まさか相手がゾーンディフェンスだったとはね。」

「次、勝てるかな？」

「大丈夫だ！ちなみにユニフォームが白面だったよ。」

椎が、次が準決勝だということに不安な海に声を掛ける。とうかが椎のポジティブな性格はみんなに言い影響を与えているかもしれないかった。

時々、悪い方にむかってその度に海に突っ込まれるが。

「次の試合って12時半ぐらい開始だからみんなでお昼食べようか？」

今の時間は10時20分。

まだまだ時間があるので、

「はるちゃんは何かご飯持ってきた？」

「ううん、次の試合があるなんて思ってなかったから。」

「近くにコンビニあるんじゃない？」

香の案にみんな賛成し全員で行くことになった。

「試合あったからお腹すいちゃったよっ。」

汗まみれになったTシャツを上から着て出発！

第12ピリオド：Transition Game（後書き）

前に書いた通り次回は6月！

第13ピリオド：Altanate Pass（前書き）

お久しぶりです。グランです。

やっと部活に一段落がついて、時間ができた・・・と思いきや約半年後へ向けての試練が待っていて結局時間が取れないという（涙）では、行きマース

第13ピリオド：Altanate Pass

「みんな何買ったの？」

恵がみんなに聞いて回る。

「鮭と昆布のおむすびだよっ。」

とは優の昼飯。

「あんばんと、ツナぱん、それにホットドッグにクリームぱん、それから（以下略）」

と、大量のパンを昼飯にしているのは遥。

いつもながら遥はふつうの女子高生より倍以上は食べる。それと関係があるかはわからないがやっぱしすこし太った体型になっている。「身長がもうちょっと欲しいかなっ。」

12時半、ちょうどに前の試合が終わったようだ。

整列が終わったと同時に6人はアップするためコートに入る。

この準決勝の試合は勝っても負けても明日にもう1試合ある。しかも10分間×4ピリオドあるため6人にとっては少々つらい。

相手チーム、

『オールブレイカーズ』

の身高さは、

5人175ぐらいの人がいる、しかも他の人も160は全員超えている。

なかなか身長があるチーム。

「三角パス!!」

相手の4番、キャプテンらしい、が威勢がいい声で指示を出した。

「あの人怖そうだね。」

「でかいねえ。」

他の人も背が高い。

「ドリブルシュート！」

相手チームがレイアップを始めていく。

声量がすごくて、こっちまで響いてくる。

「やっぱり準決勝まで来ると違うな。」

「こっちもアップしようっ！」

こっちもレイアップで体を温めていく、がいくら簡単に勝てたとはいえ20分間戦ってきたせいかな朝より威勢が少し弱くなってきたりするようだ。

「試合開始まで1分半！！！」

の審判の笛が吹かれて6人はベンチへと行く。

「じゃあ、スタートは。優以外。」

「で後半恵ちゃんと交代するんだねっ！」

前の3試合はずっと前後半で代わっていた。しかし、

「もし、相手の、ペースになっちゃってしまったら。椎とか、香とか。」

「えっ！私センターできないよう〜。」

優の身長は125、香は180あるのだ。当然ゴール近くのプレイはできない。

「3ポイントで、流れを、変える。」

海は素晴らしいコートへ入る。

「いつでも出れる用意しとけよー。」

椎が優の背中をおす。

「みんな、ファイト！！！」

：「レッドドライバーを白、オールブレイカーズを青。礼！」

決勝への切符を賭けた試合が始まる。

「緊張、するね。」

「みんな、いつも通りにいこう！」

両チームの4番同士が握手をし、声を掛け合う。

「よろしく。」
そしてジャンプボールが上がった。

：一番に早くボールに触れたのは椎のマークマン、12番だ。
ボールを取るとすぐさまゴールへ向かう。

椎がゴールを決められないように抜かれないようにするためのディフェンスを張った。

プレーヤー同士の距離は1メートルあり、12番が右へ小さなフェイクをかける。

左に抜くのか？軸足は左足だし、右から抜くのは厳しいかな。
判断し自分の右足に重心を置いた。

そして左へ抜こうと大きくドリブルしてくる。

コースへ十分入れるのでなんとか初得点を獲らせない。椎がコースに入る。

その時、いやコースへ入ろうと足を移動させている時かもしれないがさつきよりも大きく後ろにドリブルをされた。

椎がディフェンスの構えを解ける前にワンハンドシュート、しかも3ポイントラインより1メートル後ろから。

ゴールネットを巻き込んだ3ポイントショットがこの試合初得点となり攻守交代する。

「切り替えてオフェンスで一本獲ろう。」
恵が指示していく。

「相手のディフェンス、ゾーン（地域を決めて守るタイプのディフェンス）だぞ。しかも2-1-2のタイプだぜ。中に入れんの難しいなあ。」

2人でコンタクトをとりデカイ2人にはゴール近くより外に出てもらってディフェンスをひろげさせる事にした。
なんで2人かって？それは後で分かる。

「海とはるちゃん外に一旦出て！」
ボールを運び終えて2人に指示する。

2人が外へ広がるとマークマンもそれにつられていきゴール下は香と8番の2人になって1対1の状態となる。

「センタープレイ頼む！」の声でポジションを取り始めた香へパスを入れる。

いろいろギミック、技術を持っている香は、ターン シュートフェイクをして相手を跳ばす 一歩踏み込んでブロック回避からの上手いシュートで2点をカウントする。

後に「また、香が、上手くなった。」「この大会中にまたすごく上手になった。」

等の感想がチームメンバーからあった。

それはそうと2-3。

レッドドライバーの6人は今まで3ポイントショットの奇襲を受けたことがなかった。

はやく逆転しよう。チームの全員が思う。そしてなんとか点をとれたものの相手は1回戦のチーム、リング・アウェーズと等しいくらい上手い。

：前半終了時にはレッドドライバーは10点差で負けている。

あれから4番や7番のセンタープレイで得点を許した、と思えば外から3ポイントシュートがどれだけこっちが厳しくチェックしても隙がすこしでも出来ると打たれていく。

隙無くディフェンスをしてるつもりなんだよ、こっちは（by 椎海のファールが4個溜まってしまいあと1回でもファールすると退場、出れなくなってしまふ。

遙はまだ1得点もとっていない。リバウンドは18リバウンド。遙曰く

「もつとシュートチャンス増やしたいからまだまだダメだ。」
らしいぞ。

「後半は誰と交代っ？」

「そうだな。椎と。」

「分かったようっ。」

「リーダー、なんで交代なんだよ。」

「相手の、メンバー、代わるから。応じて投入する。」

椎はあんまり納得してないようだが、「出番くれよう。」

とベンチに座っていく。

23ー33。

けっこう差がついてしまった。

後半戦の相手は4番を除き交代してきた。

この試合が今日2試合目だということも関係あるだろうが体力的にきつい。こっちは6人しかいないからなんとかして決勝戦に進みたい。

こっち、レッドドライバーからのオフェンスでゲーム再開する。

「よっし、いくよ。」

優の声からプレイが始まっていく。

「優、行って！」

後ろから遙がスクリーンに来る。

遙の体型より外されることは無く優がフリーとなって、スローインパスをもらう。

が、完全にフリーにはなれない。

「15番に付いて、スイッチ！」

相手のスイッチコールが早く、優とディフェンスとの距離、僅か50センチという所から、

優の最高武器、3ポイントシュートが放たれた。

「速っ、スクリーンアウト！」

マークマンの11番はシュートに対して反応が出来なかった。

それぐらいのスピードで打ったにも関わらず、キレイにリングを通過してしまう。

「また凄くなつたなあ。」

レッドドライバーのメンバーは全員思う。なかなか速いスピードで、

しかもワンハンドシュートでネットタッチ（接触）しないで入れられる人はなかなかいない。

ともあれ、レッドドライバーが3点追加した。

デイフェンスに切り替えようとマークマンに付く前に、恵と優のマークマンにあつという間にフロントコートまでボール運びされてしまう。

「やっぱり準決勝ともなると違うね。」「他のチームより強いねっ。」

後を追いかける2人が会話している間に中へとパスを入れられてしまっている。

「はるちゃん、シュートチェックに行つて!!！」

遙の前に同じような体型の10番がポジション獲りして、そこから勝負。

隙の間をくぐつてシュートしようとする10番に対して、

「チエーック!!！」

凄まじい声のプレッシャーをかけたおかげかシュートは外れ、そのまま運良く遙の元へリバウンドボールが落ちてくる。

「めぐみん、速攻!!！」

取ったボールを恵へ渡しドリブルで運んでいく。

先に走っていた優へパス、マークマンが追いかけて来たのを確認しドライブしようとするが、海のマークマンが戻ってきていないことに気づき、フリーとなる海へパス。

「優、ナイスパ」

言いかけた時、凄いスピードで戻ってきた相手の4番の手に当たった、というより狙われたという方が正しいかもしれない。

「ターンオーバー!!！」

相手に、逆速攻されないように急いでマークマンの確認、マークしてなんとかゲーム展開を遅くさせた。

優の相手、11番にボールが渡った。

「さっきの3ポイントには驚いたよ。凄いね、おチビちゃん。」

「チビじゃないよっ！」

一番言われたくない事を言われて相手の挑発に乗ってしまったか、ドリブル中のボールを奪おうとするが相手は回って交わし、ドリブルチェンジで交わし、ますます優を挑発した。

「じゃーね。」

その言葉と共に切り込もうとする。

優もそれに合わせてコースを塞ごうと付いていくが、

「がはぁ!?!」

気づくと巨大な壁に見える4番がスクリーンしに来ていた。

優は付いていこうとするスピードを落とさずに壁へつつこんでいったが相手はビクともしない。むしろ小柄な優の方が吹っ飛んだ。

「優！スイッチ！」

珍しく慌てた口調の海が、スイッチして11番のドライブインを止めようとする。

レイアップのためにボールを持ち上げる動作に入った時、ブロックできる。そう海は思った。

叩こうとして11番の左手にあるボールへ手を伸ばしてぶろっくしようとして力をこめて振り下ろした瞬間に、相手は空中でボールを右手に持ち替えた。

海の手は空となった左手を叩いてしまった。

11番の手から投げ出すように放たれたレイアップは、バックボードに反射してゴールに入ってしまった。

「白4番のファール、フリースロー1ショット。」

審判の笛が吹かれてバスケットカウントされた。

「くう。こんな、時に。」

リバウンドを獲るためにフリースローレーンに並ぼうとする海だった。

しかし、ブザーが鳴り

「白4番、5ファール、退場です。」

と言われた。

「交代して下さい。」とも審判に言われた。悔しい、なんでこんなファールを前半に重ねてきたのか。初めて海が、悔しそうな悲しそうな表情を表した。

そんな海に、

「リーダー。俺がリーダーの分までやっていくぜい。」
ハイタッチをしようとしている椎が声をかける。

「ちよつと休憩しててな、決勝には必ず行こーぜ。せつかくの夏休み、もうちよつと楽しみてーな。」

「頼む、私が、前半ファール、しなければ。」

「あと頑張るからよお。」

椎は無理矢理海の右手を挙げさせてハイタッチをした。

「交代よろしく。」

オフィシャル席に交代を伝え、そしてブザーが鳴ると同時にコートへ、

椎が入っていった。

第13ピリオド：Altanate Pass（後書き）

次回の更新予定は8月中かな？

まあ頑張つて出来るだけ更新できたらいいなと思う。

最近、無性に担々麺が食べたい（辛

この前、デパートのラーメン屋でなんとか涙目で食べ切れた^^

第14ピリオド：Pick And Roll（前書き）

早くも約束破ってしまいました。
それではごうぞ。

第14ピリオド：Pick And Roll

椎がコートへ入ると同時に恵が審判に伝えタイムアウトを、レッドドライバーは取った。

優と恵以外はベンチに座って、各自休憩をとる。

とにかく激しい疲労のせいかダラツとした体勢になっているが。

あつ、遙が大量にスポドリ飲んでる、500ミリぐらい。

「海が退場しちゃったから、マークマンを変えたいんだよ。」

「俺じゃーあのデカ物は相手できねーな。」

椎と相手4番の身長差は目測で15センチぐらいはあると思う。

そうなるとディフェンスする時もオフENSする時もかなり不利と
なってしまう。

「とにかく4番には、この中で一番大きい香が良いと思うんだ。で
9番に遙。」

椎には10番を頼めるかな？」

「中入れられたらどーしようもねえぞ。」

「この前の遙みたいにな、かなりプレッシャーをかければ落とすよ。」
遙を指差しながら言う。

「じゃっ、私と恵ちゃんの前と同じマークマンに付くんだねっ？」

「うん、じゃみんな行くよう。」

残り8分50秒。

11番のボーナス1フリースローが入ってから、オフENS開始。
いつもどおり優と恵の2人で運んでいく。

そして椎とその相手（マークマン）、10番を観察して、

「10番の人すごいディナイディフェンス（パスを入れさせないよ

うにする)だよっ。」

「椎にボール入れるにはちよつと難しいかな。」

香か遙にパスを入れようと思ひ視線を中ポジションへと向ける。

10番は、椎が鋭く速いドライブの1対1が武器の選手だと認識し、なんとかパス自体を入れさせないようにとしているようだ。

「しつこいなあ、疲れねえのか、そのディフェンス。」

「いつもやってきている形だから全然疲れん。」

さも余裕のような笑顔を向けてくる。

「遥みたいに体格いいから俊敏性がねえと思ってたんだよ。」

「遥って?」

「うちのチームの5番だ。」

「なるほどなあ。」

さつきからプッシュトークが続いている。

顔は怖そうだが性格は優しいらしい。

会話しているせいで2人ともいつのまにか足を動かすスピードが緩まっていた。

「それから、!」

「くっ。」

椎が話を続けようと思ひ意識を自分に向けてから一瞬で、スピードを速くしてあのしつこいディフェンスから脱出した。

「恵、パスくれ!」

「おーけー。」

まるでいつディフェンスを振り切ってどこでもらうか分かっているかのようにパスが出された。

「届けえ!」

パスカットを必死にしようと10番が付いてこようとするが、間に合はずもなく、

「うらあ!」

パスキャッチから流れるようにドライブしていく。

カバーしようと慌てている9番の腰横からバウンズパス、そして遙

のシュートチャンス！

「ふがつ！」

前回とも同じくリング手前に弾かれてしまった、

「リバウンド奪取！」

これで25リバウンド

逆サイドでポジション取りしている香へパスを回す。

オフェンスはなるべくパスを回した方がチャンスが生まれることが多いのだ。

ここでディフェンスをかわすようなフックシュートを打った、

「前走れ！」

が、4番にブロックされてそのまま外にいる6番へパスが通る。

「いくよっ！」

掛け声と共に優のマークマン、11番が速攻に走り出した。

優も付いていこうとするが、なかなか速く追いつかない。

「優っ！後ろからパス！」

誰かが言う声に反応してジャンプして手を伸ばす。

しかしというかジャンプ力が少し高いと言え優の身長が120代のせい、擦ることもなく11番の手へ。

カットされると思って逆速攻防止（ターンオーバーセフティー）の準備をしようと思ったけど、カットされなくて良かったあ。でもなんであんな小っちゃいんだろう？可愛いけど。

速攻を喰らい、これで11番が連続5P獲得。

なんで身長無いんだろうねっ？中学時代はシューティングガードしかやらしてもらえなかったよ。

1対1は好きだけど、中に入っちゃうと高い人がブロックしに来る。フェイクが完全にひっかからないんだよう。だから3ポイントシュート一筋に賭けたんだ。

ここだ。点差が12点も開いちゃった。

「パスッ！」

優が最高のスピードで11番を振り切つて、恵からパスを受け3ポイントシュートを打とうとした。

「優、チェックが来てるぞ！」

椎の警告と同時に、シュートしたボールが11番にブロックされ、たたき落とされた。

「くおっ！」

落ちたボールを拾いまた3点を狙おうとする。

11番はドライブにもシュートにも対応できる体系をとり、ひたすらブロックしようとして来る。

「……無理はするなああ！」「……」

他のメンバーが優に対して、打つな、と大声で言った、優の手からボールが離れそうになった瞬間に11番は手を伸ばしてくる。

ディフェンスの重心が前になったのを確認して、中へと切り込むために右手でボールを床に突ける格好になった。

11番も当然反応して今度は重心が左側へとかかり左足がそのコースを塞ごうとする。

優は足をドライブ状態のままボールを持ち上げ不安定な体勢のまま3ポイントシュートを、少しフォームがバラバラな、手から離す瞬間に、

「チェック！！！」

11番が両手を伸ばして完全にブロックできるようにした。

少しだけそえるだけの左手で、自分の右側へ落として、

トラベリングに気をつけながら、11番の脇を通るようにして抜いて、慌てて手でディフェンスをしてこようとすると相手の位置を考えながらドリブルを1回強く突いて後ろに下がった。

「ほっ。」

少しだけ不安定な3点シュートが、打たれ、11番の手が当たり、優が3ポイントを加点してバスケットカウントを取った。

「やったあー！」

優が歓喜の声を上げた。

「やっぱり優はすごいな。」「1本決めてよ。」

3ポイントシュートのバスカンはなかなか起こらない。ここでのFT1本が重要。

まあ、優は中学の時から有名なシューターであった訳だ。当然1点も決めた。

『4点プレイだああああー!!』

「あのちっちゃい子のロッカーモーションとバックビハインドショットは凄かったな。」

優を見ながらそのプレイヤーは言う。

この後、優が怒濤の連続3ポイントシュートで2点差でオールブレイカーズを下した。

残り1分で遥がバスカンの3点プレイを魅せた。リバウンド数30を超えた

優が打ち立てた記録は、

3点率：8 / 10 (80.0) 27点獲得

内、バスカン3回、全てのフリースローを決める。

さらに連続3本決める。

香の記録は、

2点率：フィールドゴール6 / 9 (66.6) 13点獲得。

内バスカン2回、フリースロー1/2

遙の記録は、

リバウンド数：OFR（オフェンス時のリバウンド）13回DFR
（ディフェンス時のリバウンド）18回の合計31本

恵の記録は、

アシスト数：8本

スティール数：19本

ターンオーバー数：1本

他にもいろいろな記録が準決勝で出たらしい。

レッドドライバー6人は翌日、朝7時半に明水駅にいた。

「おはよっ!」

「起きるの速えーな。」

決勝戦の開始時間は9:00となっている。かなり開始時間まで時間があるが、

「体育館まで、歩けば、時間立つと。」

「じゃあ行くか。」

体育館へ到着した6人は、丁度開館仕立ての中へと入り込んでいった。

「今日の試合が10分×4ピリオドなんだってよ。」

「疲れるねえ。」

試合までに各自準備体操をしておこう、恵の意見によってあと1時間ぐらいはフリータイムになった。

「決勝戦、勝つぞお!」

ティップオフはもう近い。

第15ピリオド：Unsportsman Like FouI(前書き)

連続投稿いきます。

第15ピリオド：Unsportsman Like Foul

「第10回明水市民バスケットボール大会の女子決勝戦を行います。試合開始は9時です。」

コートの中で主催の人だろうか、アナウンスが入った。

「選手の皆さんはアップを開始してください。」

10分間のコート内でのアップタイム。

「よし、アップ始めようか？」

「うん。」

レッドドライバー6人の最後の試合が^{ゲーム}始まる。

「試合開始します!」

センターサークルの中に海と、黄色のユニフォームの相手『グレイトバード』4番、小田切香穂の2人が入った。

「よろしく。」

互いに握手を交わした。そしてジャンプ体勢を構えて、

「たああ!」

ジャンプボールへと跳ぶ。

「よし。」

相手17番、若石絵美へ渡った。そしてそのまま、

「良子!」

「ほいさあ!」

88番、瀬川良子へパス。

「88番のチエックオツケー!」

椎がディフェンスしようとする、その一瞬前に、

「ふっ。」

スリーポイントラインより1メートル離れた所から3Pシュートを

放った。

「えっ!？」

椎の驚きの声と同時にネットを絡ませながらリングに入った。

「よし、ナイシュー!」

相手チームが開始早々の3点で湧き上がっている。

それに対してレッドドライバーは呆然としていて3秒ぐらい、普段冷静な恵も、動かなかった。

はっと意識を戻して、

「一本確実に取っていいこう。」

恵がみんなに指示する。椎と2人で運んでハーフラインを過ぎた途端、

相手が2人がけのプレスディフェンスをしてきた。

「うっ、苦しい。」

恵はボールを取られないようピボットを駆使していく。

「恵、ボールくれ!」

フリーとなった香へパスが出される。

そのままシュートを打とうとしたが、相手4番、身長が180はある、がブロックしに来た。

フェイクで交わし中へドライブしていく。エンドライン沿いにドライブしてカバーディフェンスが来ないようにする。そしてゴール下にいる海へパスして2点取るうとしたが、

「ていつ!」

どういう訳か17番にスタイルルされてしまった。

「はああ?」

香が疑問の声を挙げる。17番は今まで逆サイドで遙のディフェンスをしていたのではないか?

17番がいままでいた場所とゴール下は3メートルぐらいある。

この距離でどうやってパスに対して反射して、しかも奪い取れるのか?

・・・やっぱり決勝戦ともなると格が違いえんだな。

改めて相手チーム『グレイトバード』の凄さを思い知った香だった。

「香穂ー！」「おう。」

相手がわずか2秒でフロントコートまでボールを運んでしまった。

「はい！」

88番良子がまたスリーポイントラインでパスを受ける。

「同じ事2度もさせつかよ！」

椎がブロックに跳ぶ。しかし交わされてしまい、香の戻りが遅いためフリーな50番、倉谷和美にゴール近くでシュートされてしまった。

慌てて戻ってきた香がチェックした時にはシュートが入った後だった。

「くそつ。」

床を足で踏み鳴らした。

試合開始から悪い流れのままになっていることに対してイライラが溜まっていたのがつい表に出てしまった。

「香、ドンマイだつて。」

遙や恵が声をかけた。

「やっぱり強ええな。」

そう言つて前へ走つていく。

「一本、取り返していこう！」

恵が自分たちのペースを立て直す。

相手のディフェンスはやっぱり強い、どこもパスが通るようなどころがなかなか見つからない。

すると香が、倉谷を背にしてポストプレーのポジションを取った。

「中、パス！」

あまりの大声に一瞬固まったがなんとかパスが入った。

もらつてから、力強くドリブルしながら相手を無理矢理押し込んで

いく。

ゴール近くまで押し込んでから素早く右足を軸にしてターン。そのまま相手をねじ込む形でシュートを打とうとする。

しかし今回は相手もデカイ。

香がシュートしようとするボールと倉谷の右手が触れあった、だれもがブロックされると思った。

ベンチにいた優も思った。

触れた瞬間に残像を残すぐらいのスピードでボールを下げ、右手にボールを持ち、そのままかいくぐるかのようにループシュートを放った。

同時に2人の体がぶつかりあってファールが起きた。

「ぐお！」

香は倒れながら、ボールがリングを通過するのを見た。

バスケットカウント、この試合初得点。

「ふう。」

香はフリースローボールをもらって一呼吸、さらに一呼吸ついて、打った！

「リバウンドオ！」

相手チームの声が響くが、意味無かった。

当然のように入った、3点プレイ。

「うっし、お返しが出来たぜ。」

ここからレッドドライバー、本調子発動！

第15ピリオド：Unsportsman Like Foul（後書き）

執筆終わったのに、なかなかサブタイトルが決まらないから投稿で
きない（汗）

第16ピリオド：Basket Count（前書き）

フルスピードで4連続投稿いくんでそのつもりで!？

第16ピリオド：Basket Count

前回からかなり接戦が続いてきた。

3ピリオド終わった時点で、5点差で負けている。
75 - 80。

途中、最大16点差がついたが優の3Pの嵐によって離されず、追いつきムードへとなった。

「優が、いなかったら、負けてた。」

「そんな事ないよう。」

「いや、やつば優はすげえな。」

「遙ちゃんの方がすごいよつ。12点取ってる！」
優に褒められたのか、大量得点取れたからなのか、遙の顔は赤かった。

もうすぐ4ピリオド、最終ゲームが始まる。

「俺たちが勝つぞ！」

そして、

「ウオオオオオイ！」

円陣をレッドドライバー6人で組み、コートへ椎を除く5人はコートへ入っていく。

「追いついていくぞお！」

ベンチから、3ピリで優と交代した椎が声を掛けていく。

「パス、ちょうだい。」

海がボールを、ハイポストで要求してくる。

そして恵からのパスを受けて、相手4番、香穂と背で対峙した。

「今度は。負けない！」

「全力で来いや。」

海の押し込んでからのターンシュート、それは一番早く見破られた。

シュートフェイクから一步踏み込んだのシュートもブロックされてきた。

かろうじて香の技術とクイックネスで勝負できたが、香にはもう一人のセンター、28番桜井瑠衣がついている。

「くっ、この。」

中に入ろうとしても、逆サイドへ走り込んで行くこととしてもボディ―チェック（体全体で相手の進行を止めること）で、なかなか行かせてもらえずイライラしてた。

3ピリからずっと仕事をさせて貰えずに、さっき相手を無理矢理吹っ飛ばして動こうとしたらオフエンスファールを取られてしまいさらに動けなくなっていた。

「てりゃ」

海は何度も考えた。

どうやったら攻略できるか。

4番、香穂と正面で向き合い、そのままシュート、フェイクをかけたが引つかかってこないのを確認して、なんどもフェイクした。

（なんだこいつ、そんなフェイクかかるわけ無いのに）

フェイクだけをしてくる海に対して香穂は思った。

そのまま3秒ルールになる前までやっていた。

なんだ・・・？

そう意識が海の謎のフェイクだけにしかいかなくなった瞬間、海が自身全力のジャンプをしてハイポストシュートを放った。

香穂の反応が一つ遅くなり、ブロックしようとした手は腕を叩いた。海の体が少しぐらついたが、なんとかシュートは決まった。

77-80。バスケットカウント。

「ぶっ。」

海の体から息が漏れた。そして、

「すごいよ海！」

「ナイシユじゃんか、海。」

「海ちゃん凄かったよう！」

「海すごいな。」

「リーダー、ナイスバスカンじゃねーか！」
みんなから声をもらった。

フリースローレーンに行く。

グレイトバードは動揺していた。

チームの要の4番小田切香穂がまだ試合時間9分以上残っているのに4つもファールも重ねてしまったことに。

ファール5つで退場となってしまうとは、いくら他にも身長高い人がいるとはいえ圧倒的な強さや雰囲気支配していた『中』が弱くなってしまう。

一番香穂自身が落ち込んでいた。もう積極的なディフェンスもできなくなつて、ブロックも手が当たることに不安を覚えた。

最後まで頼むぜ、海。

落ち着いてね。

そんなリバウンダー2人から心を通じて声が聞こえてくる。

「ほつ。」

リングを見る。周りは静かだ。自分の鼓動だけが聞こえる。

何か安心して打ったフリースローは、もちろんリングにもネットにも触れずに通過した。

「やった。」

78 - 80。

「相手のオフエンスくるよ。」

恵の声でディフェンスへとレッドドライバーは切り替わった。

優のマークマンの14番、輪島有希へスローインパスが通った。

そしてドリブルで運び始めようとしてドリブルを突いた瞬間、優が体勢を低く、体をねじるようにしてステイルした。

「ナイスカット優。」

「いくぞお！」

味方の声が届く前に3ポイントラインへ向かった。

輪島は慌ててコースを塞ごうとして動き始めた。

3ポイントライン前でぎりぎりコースに入り、

これなら抑えられる、

と輪島は思いそのまま正面へ。

しかしその前で優はボールをシュート体勢へと持ち上げていった。

打ち始めにシュートチェックへいった輪島。

その前にボールを放った優。

体全体で押されるように、はね飛ばされるように、優の軽い体は中に舞った。

ズシン、と背中からコートへ打ち付けられた音とボールがネットを絡ませながら入っていった音がするのは殆ど同時だった。

審判がアンスポーツマンライクファールと3ポイント成功のサインを出した。

「……優ー!!」「……」「優。すごい。」

会場がどよめいた。

歓声と喚声が包み込んでいった。

「痛っ……いよっ……!」

優は体全体に來た痛みに絶えようとしていた。シュート入ったかなあ？

入ったら逆転だっ!

フリースローだもんねえ、ここは入れるぞっ。

そう思っているのになぜか優の体は動かない。

「優、だいじょうぶ？」

「しっかり、立てるか？」

レッドドライバーだけでなく相手チームも、観客もみんなが心配した。

「立てる？」

審判の人も声をかけた。

「……うぐう……ううう……。」

なんとか優は苦しそうに声をあげた。

「……7番と交代お願いしま」

審判が言いきる前に、

「……おっけいっ！」

優が拳でコートを叩いた。

第16ピリオド：Basket Count（後書き）

最近、かなり腹が減るようになってきた。今も腹減ったw

第17ピリオド：S e e s a w G a m e（前書き）

今日はこれで終わります。

第17ピリオド：Seesaw Game

床に手を付きながら優が立ち上がった。

「フリースローっ、だねっ。」

フリースローラインへ歩いていく。

「無理、しないで。」

海がそつと声をかける。

「うん。」

ボールをもらってからすぐに打った。

いつものように綺麗には入らず、リングの縁に当たってなんとか入った。

「ふう。」

シュートを決めてもう一回のオフセンスへと動いた。

アンスポーツマンライクファールを捕られると相手にフリースロー

+相手のスローインから再開される。

(すげえな優は。私もいつちよやるか。)

香はさっそく動き始めた。

「恵、パスくれ!」

恵は3ポイントライン付近にいる香を見て考える。

「分かったよ、香。」

パスが入る。

「動かして貰えないんだったら、」

「ああ?」

ボールと足を右へとフェイクさせる。

「こういうのはどーだ?」

少し空いたスペースを使ってロングシュートを打とうとフォームを構える。

「ちっ！」

28番、瑠衣がブロックへすかさず来る。

この試合じゃ香は一本もゴール近辺のシュート以外打っていない。ロングは入らないからだろうと思った。けどまさにロング、しかも3ポイントラインにほぼ近い所から打とうとしている。

一本も入っていないの一本も打っていないのでは違う。そこからのシュートが入るかもしれない可能性だってあるのだ。だから跳んだ。

その右横、エンドラインを割るように切り込んでくる。

「香穂、カバー行って！」

誰かの声が舞う。

5対4の状況じゃ誰かがフリーになる。今、身長もスパンも高い香がドライブしてくる。

「カバー、オツケー。」

香と香穂の一騎打ち。

コースへ入ろうとする香穂の少し横を、体をねじれ込むようにレイアップへ行く。

「チエックー！」

声のプレッシャーにも、微妙に当たって絡ませてきた手に動じることもなく、

ボールをリングの中にねじ伏せた。

笛が鳴る。

「4番のファール！カウント！」

そして、オフィシャルからの声が上がった。

「黄色4番、5ファール退場です。」

えっ。

瞬間に会場からざわめきが起きる。

「香穂、交代するよ！」

グレイトバードのベンチから、これまた身長180はあるかないか

の78番、小泉彩香が出てきた。

くそがつ。いままで退場おろか4ファールにもなんなかったのに。なんでだよっ！

あの審判め。腹立つよなんか。地面を踏みならした。

「香穂、交代するよ！」

彩香と交代か……。まーいいや。

「4番と8番、潰せ。」

耳元で囁いた。

「えっ。わざとのファールは危ないと思うけど……。」

「自然的にやってくれ、な。」

そう言っつてベンチに戻った。

「ナイシユーだよっ、香ちゃんっ！」

香と優がハイタッチしようとするが身長差で、触れあわなかった。

「へへっ。」「ははっ。」

「すごいな。香は。私ももっと決めたいな。」

「頑張れよな。」

「入れてね。」

遙、海、香が話しながらフリースローレーンに行く。

「リバン頼むぜえ！」

声を出しながら打った。

「入るっつて。」「入る。」

遙&海の予測入った。

「よし。ディフェンスいくぞ。」「入れた香が声を出し意識を切り替えさせて、

「ここ守るよ。」「恵が締めて、

「いいよー!!」「」

チームに統率が生まれてくる。

最初会った頃には連携があまり取れていなかった。

声を出すなんてことはなかった。個人技術が集まった物だった。だけど、

6人はただただ進んでいく。

残り時間がもう後1分、78番小泉彩香が海に対して3つ目のファールをしてきた。

香穂の作戦だった。

海はもう3つもファールがかさんでいる。

退場させる。香穂が彩香へ言ったことはただそれだけだった。

そして、レッドドライバーがディフェンスの時だった。

無理矢理押し込んでくる彩香に対して、

「ぐっ！」

押されないようポジション取りをしている。

「たあ！」

肘を海の顔に入れながら、彩香がシュートを打った。

笛が鳴り、

「オフエンスのファール！」

彩香が4つ目を犯してしまった。そのまま、

「いや、ごめんね。」

彩香が海に対してうつすらと笑みを浮かべながら謝った。

その時、

「殴んなよ。」

とてもイライラしてそうな声で海が、普段言いそうにもないこと、そしてバスケの試合には似合わないセリフを吐いた。

「さっきから、痛い。」

そう言いつつ彩香に寄っていく。

「わざとじゃないってば・・・。」
「あんたも、4番も、ひどいなあ！」
そして、強めに言っつて肘を腹へ入れてしまった。
「えっ。」「あわわっ。」
選手も、そうでない人も声をあげた。
本来やつちやいけないことをやってしまった。
「4番、テクニカルファール！フリースロー！」
審判からコールされてまた会場はどよめく。
メンバーが海へ集まる。
「やつきになんじゃねえぞ！」
「落ち着いて。」
「ごめん、なさい。」
言っつて、しゃがみ込んでしまった。
「プレーで返そう。ね？」
「あと一分だなあ。フリースロー2ついれられたら3点差になっち
まうじゃんかよ。」
「それじゃ、」
言いながら恵は審判の元に行く。なにか話した後、
「タイムアウト、白！」
レッドドライバーのタイムアウトコールが鳴った。
恵が戻りながら、
「作戦と休憩タイムを取ろう。」
人差し指を立てながら言っつた。
「あと一分で私らの夏おわっちゃうなあ。」
香が飲み物を飲みながら、溜息ついたように言っつ。
「後悔しないように、今、作戦立てるところね。」
頭の切り返しが早いな、と他の5人は思っつた。

第17ピリオド：Seesaw Game（後書き）

たぶん、あと1、2回で完結すると思います。

第18ピリオド：Last One Play

タイムアウトが明けた。テクニカルファールのフリースローを入れられ、なんとかその後のデイフェンスでパスをスティールし、奪った。3点差。残り1分。

みんなが緊張、興奮している。

「一本、ゆっくり返していこう！」

恵が、ゆっくり、8秒ルールに引っかからない程度にボールを運んでいく。

「はるちゃん！」

遥へとパスがわたる。

「ハル、パス、ちょうだい。」

頭を上った血の気が冷えいつも通りになった海へパスが繋がれた。

「勝負する？時間無いよう。」

何かと彩香が挑発してくるが、

「しない。」

横へとボールを受け流すようにして外にボールを出した。

「また、今度。勝負は。」

そう言つて、中から外へ、

中には代わりに香と瑠衣が入ってくる。

「あんだ、デイフェンスうめえんだな。」

「あんがと。」

ゴール下でのトラッシュトークが繰り広げられる。

香がちらつとタイマーを見て残り時間を確認する。残り43秒。

「優、中くれ！」

シュートフェイクして中へ突っ込んできた優からパスが出る。

「最後かな。」

さらに中へと足を入れ、パスを受けると同時にシュートを打とうと意識しながら話す。

ボールが香の手に触れる寸前、

「ふいいい！」

瑠衣がいつの間にか、前へ回り込み正面からパスをカットしていた。

「あつ……」

「速攻！」

ボールはあつという間に、前に運ばれて、今までの時間に3ポイントを5/5で成功してきた14番、有希にボールが渡ろうとしていた。

速攻を成功させるには一番前の人にパスした方が手短にすむ。

そして今回も、もうセンターラインぐらいまで走っている有希にパスがでた。

「ふう、相変わらずパス速いねえ。」

なんて言いながらチャッチ、

できなかった。

「はっ!？」

後ろを向くと、ボールを抱え込むようにしてスティールした優がいた。

「優!!」「前運べえ!!」

みんなから声が聞こえる。

パスしよっかなっ?でもみんなにディフェンスついちゃってるようじゃ、自分で点取りにいつてみよっ

14番の人後ろにいるしっ。

優が1秒かそれくらい抱きかかえてからドリブルしてきた。

速く、正確な。

いかにもそのまま人が密集しているゴールへ突っ込んでいきそうだった。

3ポイントラインより2メートルぐらいゴール近くへ突っ込んだ所

で、カバ―の人が来た。恵のマークマンだった。

「優、私フリーだよ。」

恵が出している声に優が反応して顔を向けた。

「カバ―お願い！」

9番の人が声を出すと同時に、

「うりやつ！」

とてつもない身体能力でドリブルをつきながら2メートル後ろ、ちようど3ポイントラインまで引き下がった。

「えっ。」

そんな声を聞きながら優は、

高く、すごく、さらに高く打った。

高く打ちすぎだと誰もが思った。

しかし、リングに対して真っ直ぐ、音も立てずネットにも触れず、リングの真上からボールが降ってきたようにして入った。

ついに同点。残り時間31秒までなった。

「すげえ、すげえぞ優ー！！！」

「うおおー！」

メンバーが一斉に優へ飛びつく。歓声の嵐。そして、

「タイムアウト、グレイトバード！」

最後となるだろう、1分間の作戦タイムタイムアウトが取られた。

「あと31秒だよ。」

恵が肩で息をしながら言う。

「相手のオフフェンスは、たぶんゆっくりと時間使ってくると思うんだ。」

「それしかねーんじゃねーの？31秒で同点でオフフェンスならよ。でディフェンスん時は激しくってか。」

「じゃあ、」

珍しく海が大きな声をだした。

みんなは少しびびくりしていた。

「パスカット、狙う。相手の、ゴール近くで。」

言いながら優と恵に視線を向ける。

「2人が、前へ走って。速攻だせば、良いと思う。」

みんな、特に優、恵はそれに納得したようだった。

「じゃ、走っていきよ！」「おっけい」

6人で集まって円陣を組んでいく。

「いっくよ、12の3、「ディフェンス！」」

最後のプレイタイムが始まる。

相手が外側でボール回しを始めてきた。

恵がパスカットしようとパスの軌道に手を出すが届かなかった。

「くっ。」

14番、有希にボールが渡る。キャッチしたと同時にシュートフォームを構えた。

「チエック！」

優が、なんとかプレッシャーをかけて入れさせないようにジャンプした。

しかしフェイクでかわされて、そのままドライブインしていく。

「海ー！」

海へカバーを要求した。

「おっけい！」

この雰囲気からなのか音量がいつもより大きかった。

有希がレイアップにいかうとするのを、ボールを叩き落とそうとしてボールに触れようと手を伸ばした

瞬間に、ゴール下でフリーになった彩香へパスがつながれてしまう。

「中入れっぞ。」

彩香にボールが入る。振り向いてのターンシュートの構え。

ここはゴール近く。時間も10秒あるかどうか。しかも24秒計も3秒切った。

間違いなく、確実にシュートを決めてくる。

「させつか!」

香が、ブロックしようと飛躍して彩香のボールに触れた。

「ピーー!!」

横から飛んでいったために手が、少し相手の手首に当たってしまった! カツンツ。

放たれたボールはリングを通過した。

「カウント! 1スロー!」

審判の声に、会場が、観客が、そして選手たちもざわめいた。あと8秒。

「や、やったあ!!」

グレイトバードでは彩香へ歓声がベンチから沸き上がった。飛び上がってハイタッチを交わしてる。

コート内は5人が集まっている。

「彩香落ち着け、いれたらすぐマークマンに密着するぞ。」
有希が中心となって話す。

そして全員でハイタッチをして、

「うっし!!」

フリースローレーンに行く。

「ドンマイだ、香い〜。」

香の側にいた遙が、香の肩に手を置きながら励ます。

「あっ、・・・うっう。」

かなり落ち込んでいるようだ。

ここで決められたらほとんど勝てる確率が減ってしまう。

負けたら自分のせい、かな。

そう思いこむたびにどんどん、体が冷めていく感じがする。

そのままレーンに行こうとした時、

「香！」

声がる方へ顔を向けると、興奮で顔が赤くなっている椎が正面に拳を突き出していた。

「リバン捕れよーっ！！」

その声を聞き、香は椎と同じように拳を、親指だけ上に上げて突き返して、

すこしだけ笑った顔でうなずいた。

「相手のフリースローが入った時は、前に走って。3ポイントラインぐらいにボール投げるからそこで3Pお願い。入らなかつたらもう前へ走って、速攻ね。」

「うんっ、りようかいしたよう。」

彩香がフリースローを打つまでの間、恵と優は作戦を立てていた。フリースローが2本の時より時間がないから手短く、ささやくようにしていた。

果たして入るのかどうか……。

「ふう。」

彩香にボールが渡る。

いつもなら、周りは静かになるのだが残り時間8秒で同点ともなればすこしざわついている。

彩香からボールが打たれた瞬間に、香が近くにいた、瑠衣へがっちりとスクリーンアウトを仕掛けた。

「んぐう。」

瑠衣が苦しそうな声をあげた、と同時に、フリースローが入った。

会場が歓喜声に包まれた。ここまでのシーソーゲームはなかなか見

られない。

誰もが勝負は付いたと思った。

3点差で8秒。3ポイントシュートしか同点はあり得ない。さすがにこの中で落ち着いて3ポイントは決められないだろうしディフェンスはプレスをかけていくだろう、というのが根拠らしい。そんな中で声が出る。

「あと8秒だ！」

最後となるうオフェンスを、レッドドライバーが始める。残り時間が0へと迫っていく。

「走れ！速攻！」

恵の声がみんな、特に優を動かさせた。

「おう。」

緊張するなか、ふにやふにやした、いつもの声で反応した。

「走らせるな。」「セフティー！」

相手は少し驚いたような声を出す。

3ポイントのバスカンを何度もしてきて、目の当たりにされてきたグレイトバードは慌てた。

そしてエンドラインにいる恵からボールが弓なりに、高く、それでも早くパスされる。

「優！いけえ！」

もう誰の声かも分からない雰囲気になっていた。

ボールをキャッチし、3ポイントラインへ運ぼうとするが、有希が今までより速いスピードでマークしてきた。

「はあ、・・・行かせねーぞ！」

呼吸しながら、優と体が接触するぐらいの激しいプレッシャーをかけていく。

「じゃあ、抜いちゃうぞお！」

プレッシャーをもるともせず、ドリブルしながら右、左と体を揺らしていく。

そして少しだけ右前に小さいドリブルをした。

それに微妙に反応して有希の体の重心が左足へかかった瞬間に、左へ大きくパスするようにボールを

前に出した。

「うっ！」

優に追いつこうと走り出そうとした有希だったが、疲れのせいか、バランスが悪かったからなのか、

体が床に倒れた。

優が、アンクルブレイカーをして突破した。

突破したと同時に優が3ポイントラインから2メートルぐらい後ろから、最後となるだろう3ポイントシュートを今までより速い回転をつけ、高く放った。

残り1秒。

「入れっ！」

ボールがリングに届くまで、けっこう時間が長く感じられた。

優以外は動かないまま目でボールを追った。

ボールがリングへと届き、そして……。

第18ピリオド：Last One Play（後書き）

続けての連投します。

果たして試合の結末は・・・！？

そしてみんなはどうなったのか！？

第最終ピリオド：Team Red Driver（前書き）

約1年かけてメイン部分は完結できました、みなさんのアクセスもやる気の原因力の一つでした。いままで、そしてこれからもこの小説を見てやって下さい。
ではどうぞー！

第最終ピリオド：Team Red Driver

残り1秒、3点差で優が放った最後の3ポイントシュートは、リングへと向かいそして音を立てることなく、

リングに入らず勢いに乗ったままコートへ落ちていった。

「あつ、・・・ああー!!!」

優のどこか力が抜けたような声と同時に、試合終了のブザーがなる。会場は静まりかえった。

誰もがこのエキサイティングゲームの興奮から一瞬で冷めたようだった。

静かになった中、コートの中から声が洩れる。

「うっ、うっ」

入らなかったのが悔しかったのか疲れが極限までできていたのかは分からないが、

コートに膝を立て、手を着き下を向いている優がいた。

その周りに海、香、遙、恵が寄っていく。

「優、・・・」

「ここまでやれたから、もう十分だったよ。」

「泣くんじゃねえぞ。」

みんなが寄ってきたことに反応して上げた顔には汗と、涙が入れ混じっていた。

「は、入らなかったああー!」

そう言い海に抱きつく。

「がんばった、いい子だ。優は。」

頭を優しく撫でる。

「さっ、整列すんぞ。」

そしてコートを中心へ歩く。すでに並んでいるグレイトバードと対峙する。

「105対108、黄色の勝ち。礼！」

「……あ（りがとうございま）した……！！」「」

礼が終わると共に静かだった会場から拍手が聞こえる。最初は少しだったがいつの間にか全体を包むぐらい大きくなっていった。

香と、瑠衣が寄り添う。

「リバン強いじゃんかねえ。」

「あんがと。そっちもな。」2人が握手する。

海と彩香は少しにらみ合った。

「4番の人、ひどかった。あなたは、無理してたね。」

「香穂からの命令だったんです……。すいませんでした。」

ぺこっ、という音が似合うぐらいの仕草で彩香はお辞儀した。

「また、いつか。」

「うん。来年にね。」

それだけ言葉を交わしそれぞれのベンチに戻っていった。

「椎ちゃ〜ああん！」

走りながら優が飛びついたため椎の体が少しぐらついた。

「おうっ！最後惜しかったじゃねーか。」

言われて優がまた泣きそうになる。

「うっ、……」

「悪りいってば〜。決勝までこのメンバーでバスケットできたから良いんだよ、俺にとっちゃ。

なっ？みんなそうだろ？」

視線を他のメンバーに振る。

「……うん……」

「ああ……」

「みんなもこー言っただから泣きやめよな〜。」
声に反応して上げた優の顔は、もういつもの笑顔に戻っていた。
「楽しかったああ!」

コートを去り、表彰式も終わってからレッドドライバー6人は体育館に隣接しているバスケットコートがある公園にいた。

「夏休みのビッグイベント終わっちゃったし、疲れたし、宿題とか全然やってねーし。」

「今度はみんなでプールでも行こうよ。」

「もう、疲れた。寝る。」

そのまま瞼を閉じそうになった海を、優が揺さぶって起こす。

「外用のボールあるしい、3対3しよー」

提案した優に向けて驚愕の表情をみんなが向けてる。

「いや、ちよつとね疲れちゃってるからみんなね。あと少ししたらバス乗って帰るっておもってるんだけど。」

「えーえ、もつとやりたかったよっ!」

ジャンプしながら言う優に対して、

「また、来年も。行こう。」

「そうだな。部活のバスケットだったらこんな楽しいなんて思わなかったもんなー。」

「昼休みバスケもおもしろいし。」

そう互いにみんな喋り、いや駄弁り始めて、結局バスに乗ったのが1時間後だった。

9月1日、昼休みのチャイムが鳴ると同時にその6人は体育館へ集まっっていく。

「待ってってば。」

「速えーぞ優!」

一番先に着いた優は、バツシュの紐を結びながら顔だけみんなの方
に向ける。

「だって、久しぶりに体育館で思いっきりバスケットするのが楽しみな
んだもん！」

子どもっぽい答え方を聞いた海が、

「少しは、大人に、なつたほうが。」

と言うのを聞いているのかいないのかボールを袋からいつの間にか
取り出して、ドリブルを突きながら

ゴールへ一直線にドライブしていった。

「スリーポイントショット!!！」

3Pのストツプ&ジャンプシュートを放つ。

ただ高く、速く、きれいな放物線を描いて。

レッドドライブ・完

第最終ピリオド：Team Red Driver（後書き）

なんか完結するとなると少し寂しい気がするの自分だけでしょうか。

物語が一つと終わっていくと、ああ自分結構年くつたな、と感じられずにはいられないのはなぜ・・・？
では。この次で最後です。

・・・自分ながら上手く締めれた（汗

第Xピリオド・T o S c i e n c t i c F r o m R e d - d r i v e r

久しぶりのレッドドライブの執筆ですが、雰囲気は保つように書いています。では、どっぞぞ！

「ようーし、海と勝負だ!」

「うん、負けない。」

椎や香たち他のメンバーは、委員会が重なっているらしく、今日の昼休みは優と海の2人だけらしい。

1対1は優が先攻と決まった。

「うりゃあ!」

優はその小さすぎる身体を使って、大きい体の海の脇を通り抜こうとした。が、

「甘い。」

海個人のフットワーク力もなかなかあるから、優をそう簡単には抜かせない。

そうしていつもの後ろへジャンプして3ポイントシュートラインまで下がってからのシュートを打とうとし、フォームを構える。

「優の、シュートは、早いけど、」

海がジャンプしてブロックしようする。

「そのパターン、いつものー!?!」

優が目の前から消える。

「ちえい!」

可愛い奇声と共にレイアップを放ち、ゴールに入れた。

「いつも、抜かなかった、のに!」

珍しく海が驚く。

「新しく開発した技だあつ」

満面の笑顔を浮かべながらガッツポーズをする優。

この2人の光景を、とある白衣を着た男が見つめていた。

「あの子が宮内っていう子かあ。これは期待できそうだ。」

そうつぶやきながら男が近づいていく。

「君たちここの生徒?」

「うん、そーだよお。」

「私たちに、なにか？」

「いや、こちら辺の体育館の修理をやっている者でね、点検しにきたんだ。」

「じゃあ、どいたほうが、いいですか？」

「うーん、一応点検は午後からなんだけど、どんな体育館かなって思っでさ。とちっちゃい方の子の頭に埃がついてるから取って上げよう。」

「ういー付いてたんだっ気づかなかったよー。お願いしまっす！」
男は了承を優から貰うと髪を触っていく。

「よし、取れたよ。じゃ僕はこれくらいで失礼しようかな。」

「点検、お疲れ様、です。」「またねえー！」

海が感謝の言葉を、優が挨拶を言ったのを背後に聞きながら男は去っていく。

「これが、宮内氏のヤツつと。」

頭から1本だけ抜き取った髪の毛を小さな試験管に入れて、ニヤニヤとした笑みをうかべて。

第Xピリオド：T o S c i e n c t i c F r o m R e d - d r i v e r

一応この話で完全にレッドドライブは完結で、次を書く予定はありません。次回作でまた会いましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2221h/>

レッドドライブ

2011年11月13日12時05分発行